

大分市 市内遺跡確認調査概報

— 2002年度 —

2003

大分市教育委員会

大分市 市内遺跡確認調査概報

— 2002年度 —

国指定史跡大友氏館跡第12次調査

中世大友府内町跡第23・24次調査

国指定史跡豊後国分寺跡

横尾遺跡第86・87次調査

2003

大分市教育委員会

序 文

本書は、大分市教育委員会が平成14年度に実施しました国指定史跡大友氏館跡をはじめとする市内遺跡の確認調査の概要についてまとめたものです。

大友氏館跡につきましては、平成13年度に約12,000㎡の範囲が国史跡に指定され、続く14年度につきましても昨年12月19日に約2000㎡の追加指定が行なわれ、二カ年で全体の約三分の一にあたる範囲が国史跡に指定されたところでございます。本年度は、庭園跡に接する北東側において確認調査を実施したところ、戦国期に池庭周辺を整備した植栽の痕跡と考えられる遺構や、大友氏館が現在推定されているような二町四方に拡張される以前の整然と配置された掘立柱建物跡群などが検出され、庭園跡周辺部の状況や館の形成過程に関わる新知見が得られました。

また、大友氏の菩提寺であります万寿寺跡の調査では、創建時の東西溝や戦国期の溝で囲まれた掘り込み事業を伴う方形空間の検出など、強大な勢力を誇った臨濟禅万寿寺の一端が姿を現し、今後の調査に期待が膨らむような注目すべき成果が得られました。

豊後国分寺跡では、推定中門跡から東に延びる溝跡が再確認でき、また昨年度の水辺の遺構の発見で注目された横尾遺跡でも、縄文後期を主体とする多量の土器を包含する中世の造成土の下層から新たに縄文前期の貝塚が確認されるなど、大野川河口を舞台とする人々の営みのようすが明らかになりつつあります。

最後に、本書が学術研究はもとより文化財の保護、さらには教育文化の向上に役立つことを心から願うとともに、本事業の推進にあたりまして、ご理解とご協力をいただきました地権者ならびに関係各位をはじめ、調査にあたってご指導いただきました諸先生方に対して厚くお礼申し上げます。

平成15年 3 月31日

大分市教育委員会

教育長 秦 政博

例 言

1. 本書は平成14年度に大分市教育委員会が実施した市内遺跡確認調査の概要報告書である。
2. 本書には大友氏館跡、中世大友府内町跡、豊後国分寺跡、横尾遺跡の調査成果を収録した。
3. 発掘調査の費用は、国と県から補助を受けて、大分市が負担した。
4. 調査及び整理に伴う事項については、各遺跡の報告文に記した。
5. 本書に用いた方位はすべて座標北（G.N.）である。
6. 出土遺物、記録資料は大分市文化財資料室（大分市荷揚町4-36）に収蔵、保管している。
7. 本書の執筆ならびに編集は各調査担当者が行った。
8. 調査体制については以下のとおりである。

大分市教育委員会 文化財課

課 長 帯 刀 修 一
参 事 玉 永 光 洋

管理係

課長補佐兼管理係長
熊 谷 一 秋
指導主事 姫 野 公 徳
主 任 幸 裕 美
主 任 桑 原 治
主 事 三 浦 亜 紀

文化財係

課長補佐兼文化財係長
讃 岐 和 夫
指導主事 後 藤 典 幸
専 門 員 塔 鼻 光 司
主任技師 坪 根 伸 也
主任技師 池 邊 千太郎
主任技師 塩 地 潤 一
技 師 高 島 豊
技 師 河 野 史 郎
技 師 中 西 武 尚
主 事 永 松 正 大
事 務 員 佐 藤 道 文
嘱 託 羽 田 野 達 郎
嘱 託 羽 田 野 裕 之
嘱 託 佐 藤 孝 則
嘱 託 小 住 武 史
嘱 託 水 町 裕 子

大分市歴史資料館

参事兼館長 木 村 幾多郎

学芸業務係

副 館 長 佐 藤 友 則
主 査 安 部 幹 夫
指導主事 藤 沢 敏 夫
指導主事 甲 斐 猛
主 査 太 田 孝 子
主 任 武 富 雅 宣
主 任 宮 崎 治
嘱 託 広 連 広 治
嘱 託 仲 摩 一 義
嘱 託 佐 藤 暁 子

文化財係

嘱 託 井 口 あけみ
嘱 託 萩 幸 二
嘱 託 宮 田 剛
嘱 託 奥 村 義 貴
嘱 託 菊 谷 史 穂
嘱 託 上 野 淳 也
嘱 託 梅 木 信 宏
嘱 託 梅 田 昭 宏
嘱 託 松 竹 智 之
嘱 託 松 尾 聡
嘱 託 勝 岡 田 ア ヤ
嘱 託 岩 尾 美保子

国指定史跡

大友氏館跡

—発掘調査概報Ⅳ—

中世大友府内町跡



府内古図A類 (個人蔵)

2003

大分市教育委員会



第1図 戦国時代の府内復原想定図（『大分市史中巻付図Ⅱ』）

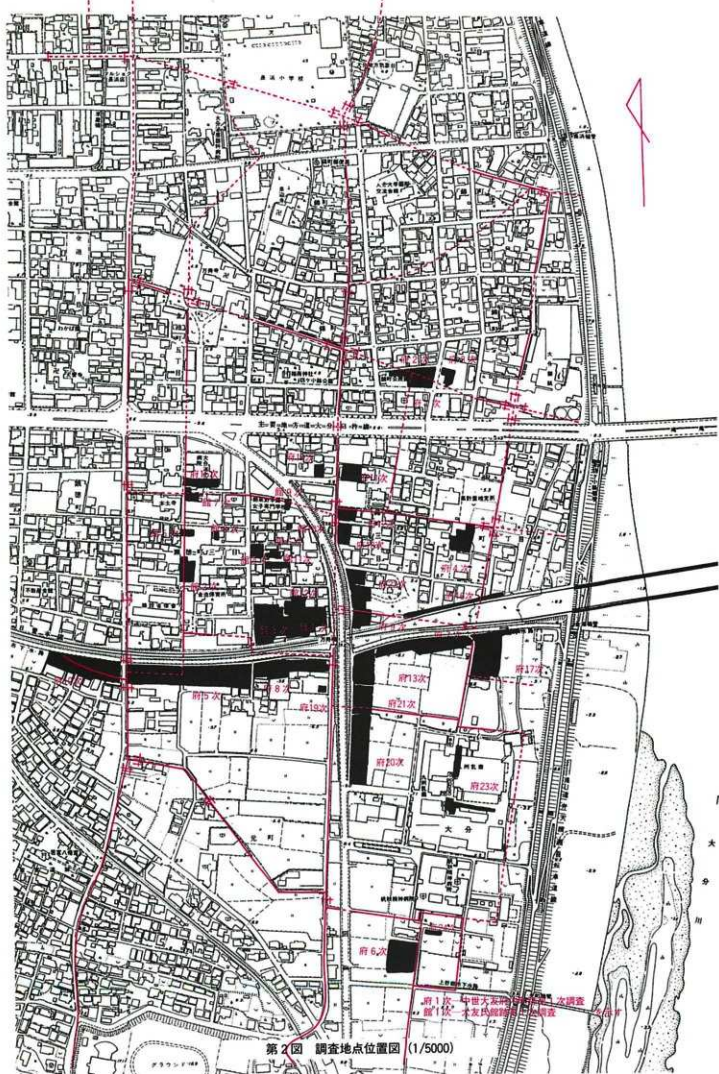
例 言

1. 本書は平成14年度に大分市教育委員会が実施した国指定史跡大友氏館跡、中世大友府内町跡における埋蔵文化財確認調査の概要報告書である。
2. 発掘調査の費用は、国と県から補助金を受けて、大分市が負担した。
3. 調査および本書の編集は坪根伸也、中西武尚、菊谷史穂、若尾美保子が担当した。各章の執筆は、第1章を坪根、第2章1を中西・若尾、第2章2を坪根・菊谷、第2章3を中西・若尾が担当した。また、「中世大友城下町跡」に関しては、県教育委員会調査分との整合をはかるために、市教委と合同の調査指導者を開催し、調査方法についても可能な限り共通理解の中で進捗させるように努めている。このような状況の中で、共通の時間軸としての土器編年の整備も併せて実施しており、現時点での検討成果について大分県教育委員会の坂本嘉弘氏に執筆を依頼し、第3章に掲載をした。本文中の時期比定はこの編年観に基づくものである。
4. 遺構の写真撮影ならびに遺物の写真撮影は、各担当者が行った他、大友氏館跡、中世大友府内町跡については、(有)九州文化財リサーチ・(株)九州航空に一部委託した。
5. 出土遺物の整理・実測・トレースは内田順子・堤美智代・黒田きくみ(大分市教育委員会文化財課臨時職員)が主としてこれにあたり、今村智子・三重野京子・南優子・小野千恵美・伊東祥子・首藤直美・木村藍子・近藤慎也(大分市教育委員会文化財課臨時職員)、水町裕子(大分市教育委員会文化財課嘱託)の協力を得た。
6. 本書に用いた方位はすべて座標北(G.N.)である。また、基準点の座標値は平面直角座標系第Ⅱ系による。
7. 本書に用いた出土陶磁器の分類及び年代観は以下の文献による。
森田勉「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』2 1982
上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』2 1982
小野正敏「15、16世紀の染付碗・皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』2 1982
乗岡実「中世備前焼壺(壺)の編年案」『第2回中近世備前焼研究会資料』2000
乗岡実「備前焼揃鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』2000
8. 遺跡名に関しては、その構成要素である町屋部分を「中世大友府内町跡」とし、これに「大友氏館跡」を加えた遺跡総体を「中世大友城下町跡」と呼称する。
9. 本書で使用した遺構表記は以下の通りである。

SD	溝状遺構	SE	井戸遺構	SK	土坑	SA	橋跡
SP	柱跡遺構	SX	性格不明遺構(整地層)				

◆ 目次

第1章	はじめに	1
1	調査に至る経過	1
2	調査組織	1
第2章	調査の概要	2
1	大友氏館跡第12次調査	2
2	中世大友府内町跡第23次調査	24
3	中世大友府内町跡第24次調査	38
第3章	中世大友城下町跡出土土師器の編年	43



第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

中世大友城下町跡は、昭和62年に「府内古岡」を基に製作された「府内復原想定図」により、東西0.7km、南北2.2kmの範囲に展開することが推定されていた。

平成7年度から開始された大分駅周辺総合整備事業に伴う発掘調査の結果は、中世大友城下町跡が「府内復原想定図」に極めて近い姿であったことを各所で考古学的に示し、想定図の妥当性を強くしつつある。

大友氏館跡は、中世大友城下町跡の中央に方二町（約200m四方）の規模で存在することが想定されていたが、平成10年度からの確認調査によりその存在が確実視され、平成13年8月13日には、地権者の同意を得た8物件について国史跡の指定を受けたところである。現在までに2度の追加指定を得て、推定範囲の約三分の一にあたる14,120㎡について史跡指定が完了している。

今年度の大友氏館跡の調査は、第1次・第3次調査で確認された庭園跡の北側隣接地における空間利用状況の確認を目的に調査を実施した。また、「府内復原想定図」では、大友氏館跡の南東部分に館のおよそ1.5倍の面積を有する大友氏の菩提寺である万寿寺が存在し、本年度は、併せてこの万寿寺跡の確認調査を実施した。中世大友府内町跡第23次調査は工場跡地を調査対象とし、遺跡状況の確認を主目的に調査を実施し、第24次調査は塔推定地付近の状況把握を第一義の目的として調査を行った。

2. 調査組織

調査指導者	河原 純之（川村学園女子大学教授）
	後藤 宗俊（別府大学教授）
	小野 正敏（国立歴史民俗博物館助教授）
	坂井 秀弥（文化庁保護部記念物課主任調査官）
	渋谷 忠章（大分県教育庁文化課参事兼課長補佐）
調査指導	大分県教育委員会
調査主体	大分市教育委員会
	教 育 長 秦 政博
事 務 局	大分市教育委員会
文化財課	課 長 帯刀 修一
	参 事 玉永 光洋
	課長補佐兼文化財係長 讃岐 和夫
	課長補佐兼管理係長 熊谷 一秋
	指 導 主 事 後藤 典幸、鉅野 公徳
	専 門 員 塔鼻 光司
	主 任 幸 裕美
	主任技師 坪根 伸也、池邊千太郎、塩地 潤一
	技 師 高島 豊、河野 史郎、中西 武尚
	主 事 永松 正大、三浦 亜紀
	事 務 員 佐藤 道文

第2章 調査概要

1. 大友氏館跡第12次調査（推定大友氏館跡東南地区—庭園跡北東部）

調査体制

調査主体 大分市教育委員会

調査指導 大分県教育委員会

調査担当 中西武尚・岩尾美保子

発掘調査従事者

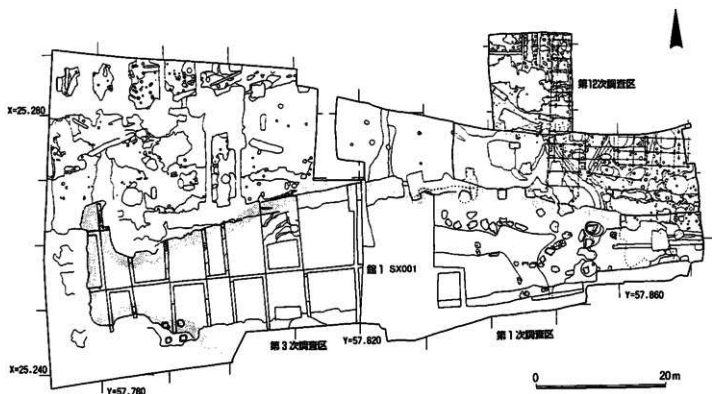
安東隆司・伊藤輝喜・今木邦友・今永達彦・大久保覚至・後藤康子・清水やす子・西田勝子・牧 宏子・

三重野 孜・草野扶美子

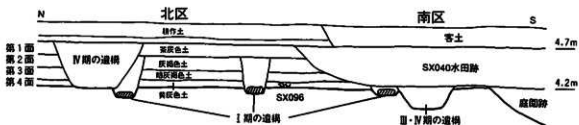
調査区・層位

第12次調査地点は、推定大友氏館跡の東南地区に位置し、第1・3次調査で確認された庭園跡、中でも景石としての巨石による石組みが確認された地点のすぐ北側にあたる。調査は庭園跡北側の空間利用状況の把握を目的とし、調査面積約550m²の確認調査を実施した。調査区は庭園遺構（館1 SX001）の北東端を含み、第1次調査時に一部検出を行っていた範囲を南区とし、今回新たに北側に設定した範囲を北区とした。

現地表面は標高約4.9～5.0mを測り、北区では、約20～30cmの耕作土を取り除くと標高約4.7mで安定した地盤に達し、その面から遺構が検出される。南区では標高約4.2mで遺構検出面となり、北区と南区では約0.5mの高低差が認められる。北区の中央より南側では、擾乱によるかなりの削平をうけており、この擾乱群の壁面などの土層観察から北区においては、4層の遺物を包含する安定面が確認できた。以下、各遺構面ごとに概要を記す。



第3図 庭園跡周辺の遺構配置図（1/600）



第5図 土層模式図

【第1面】— [茶灰土]

砂質の強い茶灰色土。全体的に玉砂利と考えられる灰色のスベスベした小石が散見される。標高約4.7mで北区全体に確認でき整地層と考えられる。この面では、水田跡(SX040)や整地の際の土入れプランと考えられる不定形遺構などが検出される。水田跡は50～60cm掘り込んで造られ、最低でも3度の造り替えが確認できる。南区の遺構検出面が標高約4.1～4.2mと一段低くなっているのは、この水田開拓により削平されたと考えられる。また、この水田跡のプランは、明治初期の地籍図にみられる地割に合うかたちで確認された。(第6図参照)

【第2面】— [灰褐色土]

やや砂質の灰褐色土。北区東側において第1面の茶灰土の掘り下げ後に、標高約4.5～4.6mの高さで遺構を検出。面的に広がっており、整地層と考えられる。この面には、平行する二条の溝状遺構(SD030・060)、掘立柱建物跡(SB145)、土坑(SK010)、ピット群などが切り込んでいる。

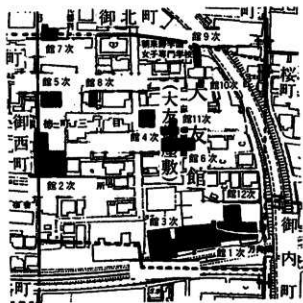
【第3面】

粘性のある暗灰褐色土で、視乱壁面の土層観察で確認。標高約4.4～4.5mで面的な広がりを見せる。この面での遺構の状況は不明である。

【第4面】— [黄灰土]

黄褐色土と灰色粘質土の混土层で、全体的にしまっており、地山との区別が難しい層である。標高約4.2～4.3mの高さで確認でき、削平をうけた南区においても部分的に認められる。現状で古代(9世紀)の遺物のみが包含される。SX096では5個体の土師器坏が1ヶ所に集中して確認でき、整地の際の地鎮の可能性が考えられる。しかしながら、現状ではこの時期の遺構は確認していない。

以上のように北区では、4面の整地層と考えられるものが確認できたが、南区では、第1面の水田跡により大きく掘削を受けており、上記のような明確な整地層はみ



第6図 大友氏館跡調査位置図と明治初期の地籍図

られず、部分的に確認される程度である。

また、北区では京都系土師器や強いロクロ目をもつ糸切り土師器など16世紀代に比定される遺物がほとんど無く、それよりも古い糸切り土師器群が多数出土しており、16世紀の遺構が後世に削平されてしまった可能性も考えられるが、もともと遺構のない空間が広がっていた可能性を指摘できる。

検出遺構の変遷

各遺構は大きく15世紀と16世紀の2時期に分けることができ、さらに遺構の切り合いなどからそれぞれ2時期に分けられ、計4時期が設定できる。(第7図)

【I期】— 15世紀前半

西側を溝状遺構(SD030・060)によって区画された極めて規格性の高い掘立柱建物跡を3棟確認している。真北から約3°東に振れ、1間は七尺を基準にして何れも建てられている。その柱穴の底には礎パンとしての根石を据えるものが多く確認でき、また、柱には一辺が約12～14cmの角柱が用いられている。

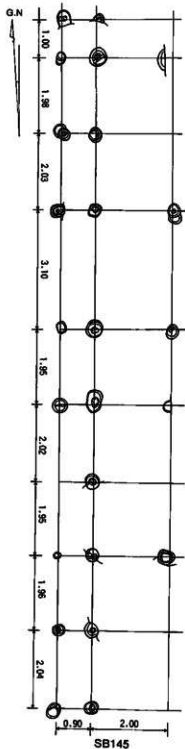
SB050とした東側の建物は、5間+α×2間+αの東西棟でさらに北東側に展開すると考えられる。しかしながら、現状で確認できる5間分のうち、中央の柱間が2.14mを測り、その両脇の柱間がそれぞれ2.08m、さらにその両端の柱間がそれぞれ2.32mを測っており、中央から左右均等に柱が建てられていると考ええると東西については現状の規模で完結する可能性が高い。礎パンとしての根石は、すでに検出面に露出しているものも見られ、かなりの削平を受けていることがわかる。根石の中には安山岩製の砥石を2次利用しているものもみられる。

SB035は2間×3間の南北棟になり、建物東側にはSB050と面を合わせた入口と考えられる柱穴が確認できる。さらにこのSB035の西側に面を合わせた建物跡(SB145)がその北側に展開する。現状で8間分を北側に検出しているが、南の1間分はSB035建物の中に入り込んでおり、それぞれはつながりをもつ一連の建物と考えられる。柱間は平均約2.0mを測るが、南から6間目のところは約3.1m(十尺)と広くなっており、入口のような施設が推定される。東西には現状2間確認できるが、西側は0.9～1.0mと短く、庇あるいは縁側になると考えられる。北側でも約1.0mの柱間で対になる柱穴が確認でき、ここで完結する可能性もある。縁側と考えられる西側の柱穴からは礎パン石が確認できず、建物本体にあたると思われる柱穴には礎パン石が確認できる。SB145建物の全容は不明であるが、SB050との位置関係をみた時、あまり東に延びるとは考え難く、現状では回廊風な建物が想定できる。

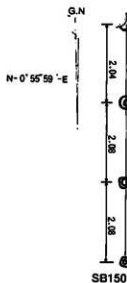
このSB145の西側には軸を同じくした二条の平行する溝状遺構(SD030・060)が確認できる。埋土の状況から同一時期に埋まったと考えられる。東側のSB030は幅約0.5m、長さは現段階で5.5mを測り、北は調査区外に延びる。南は掘削、あるいはSX040水田跡に削平されており、その延びは不明である。基底部は深さ約0.1～0.25mと浅く、雨落ちのような溝になる可能性も考えられる。西側のSD060は幅約0.8mを測り、南側は先述のSB145の柱間が広がる辺りで閉塞している。このことから建物跡の入口に対応すると考えられる。この閉塞地点は幅約1.2mと溜まり状に広がっており、ここからは多量の土師器・小皿類が出土した。この他にも数ヶ所溜まり状に遺物が集中している所がみられる。遺構の深さは約0.1～0.3mと浅いが、現時点では、炭化物を多量に含んだ最終埋没土を掘り下げた状態で止めており、さらに深くなると考えられる。各溝状遺構の間は、約0.6～0.8m空いており、ここに柱痕の確認できる柱穴が検出される。同一時期かは不明であるが、平行する溝状遺構を含めたなんらかの区画施設であった可能性も想定される。

これらI期とした遺構の埋土には、炭化物や焼土・焼土塊が多量に含まれており、建物の礎パン石にも一部焼けた跡が確認できるなど、かなりの被熱状態が想定され、これらの遺構群は大きな火災に遭い廃絶したと推定される。

N-3°5'58"-E

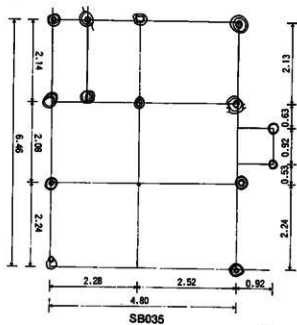


SB145



SB150

N-3°19'4"-E

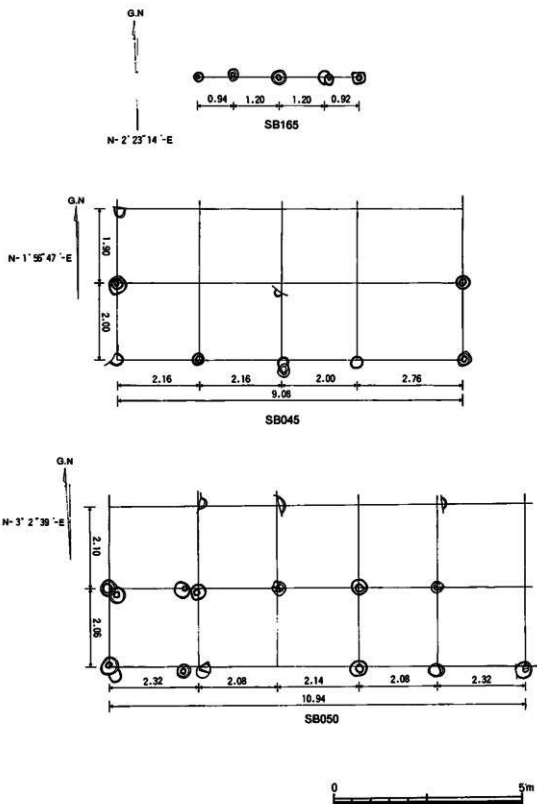


SB035

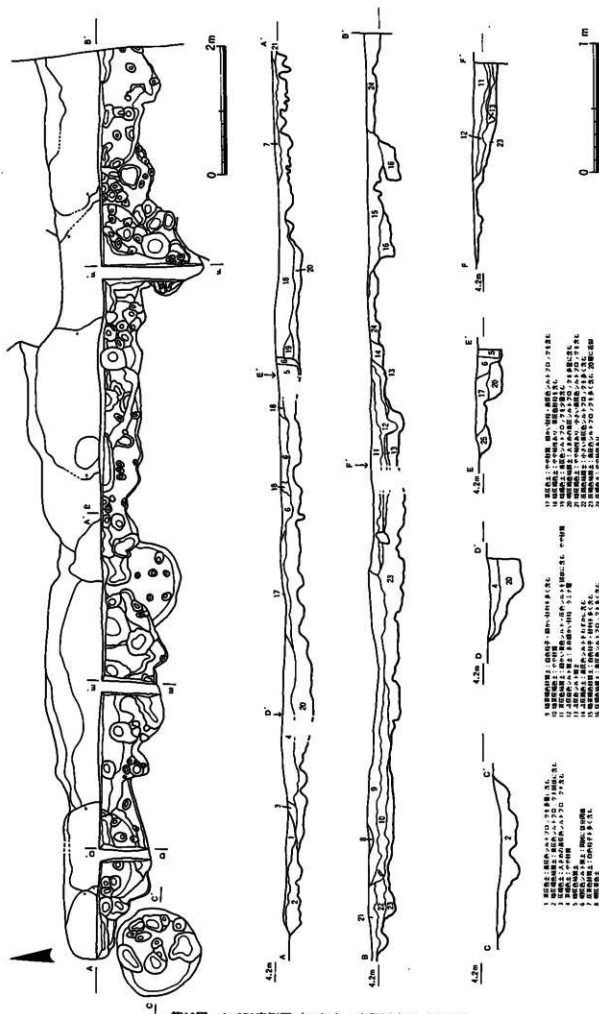
單位：m



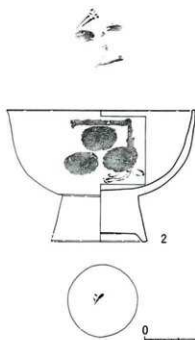
第 8 圖 SB035-SB145-SB150實測圖 (1/100)



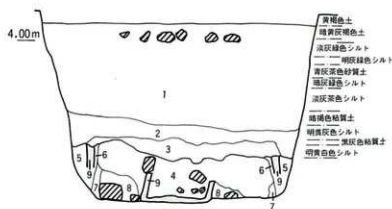
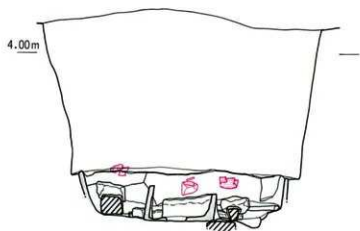
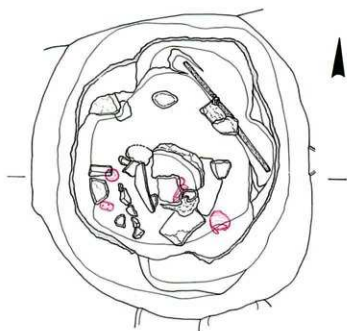
第9圖 SB045・SB050・SB165実測図 (1/100)



第10図 SX070実測図 (1/60)・土層観察図 (1/30)



第11図 SE026出土遺物実測図
1 (1/2) 、2 (1/3)



- 1 茶褐色土・灰褐色土・淡黄灰色土の混土層：玉砂利を多量に含む
- 2 1層に同じ：鉄分を多く含む
- 3 1層に同じ：鉄分の沈着物
- 4 青灰色粘質土：木片を含む
- 5 淡褐色粘質土：黄色シルトブロックを多量に含む：裏詰め
- 6 淡茶白灰色粘質土：黄色シルトブロックを含む
- 7 明灰色シルト質土：灰色粘質ブロックを含む：裏詰め
- 8 4層に近似：緑灰色シルトブロックを多く含む
- 9 淡茶灰色シルト質土：茶色砂質土の層

0 1m

第12図 SE026実測図 (1/40)

【Ⅱ期】— 15世紀前葉以後

I期の建物跡群と切り合って、真北から約1°～2°東に振れる掘立柱建物跡群が確認できる。SB045は4間×2間+αで、1間は七尺を基準として造られている。SB150とSB165については、現時点で1列の柱列を確認しているのみであるが、それぞれ東と北に展開すると考えられる。SB150は、同じく1間七尺を基準に造られているが、SB165は若干異なっている。現状東西に4間分確認できるが、中2間の柱間は約1.2mを測り、その両脇は0.92m・0.94mを測る。このことから東西2間の両側に庇もしくは縁側の付くような南北方向の特殊な建物が想定される。このSB165の柱穴がI期のSD030を切っており、約1°～2°東に振れる建物群はI期の建物群廃絶以後に位置付けられる。

【Ⅲ期】— 16世紀中葉～後葉

第1次・第3次調査で確認された庭園跡（館1SX001）が機能している段階の遺構群である。北区南側で粗い砂質の埋土をもつ大形の不定形土坑を3基（SX093・SX099・SX202）、この土坑群と庭園跡を結ぶように湾曲した溝状遺構（SD090・005）が確認できる。また、この溝に沿うかたちで地形の落ちも確認できる。SD090は深さ約2～5cm程度と残りが悪く、他の遺構についても上部が剛平を受けているため遺構自体の性格は判断し難い。しかしながら、時期的・位置的に庭園跡に関連する施設の可能性が高い。

庭園跡東端で確認されたSX070の溝状の遺構は、平面では連続した土坑状のプランが確認でき、基底部も凸凹が激しいことから通常の溝跡とは考え難い。埋土の状況は土坑状のプランに対応して、砂質の強い埋土がみられ、下部にはブロック土を多く含んだしまりのない埋土がみられる。当遺構の性格については、状況からみて樹木が植えられていた樹木痕の可能性が指摘できる。また、この北側にはSA081の溝跡もみられ、この2つの遺構は庭園跡の東側を連へいするような機能をはたしていたと考えられる。

この段階、北区には遺構が確認できず、空閑地として機能していた可能性を指摘しておく。

【Ⅳ期】— 16世紀末葉

庭園跡が機能しなくなる段階の遺構群にあたる。庭園跡の北東部に3基の井戸跡が造られる。これらの井戸跡は短期間の間に造り替えがなされ、16世紀末葉には廃絶している。（SE080→SE024・026）

SE026井戸跡は、直径約3.0m、深さ約2.0mを測る。検出面から約1.6mのところ、直径約2.1mの井戸枠が確認できる。井戸枠は砂と粘土を混ぜて互層に仕つくられた漆喰状のもので、当初、枠としての板材が抜き取られた所に鉄分が固着して井戸枠状になったものと考えていたが、中央に同様の素材でつくられた箱状の水溜め部が確認され、こうした素材で構築されていることが分かった。井戸枠の内側には、縄や木材などが確認でき、井戸枠を固定したものと考えられる。水溜め部分の周囲と下部にも縄が確認でき、水溜め部の固定と土台として置かれたものと考えられる。こうした構造の井戸跡としては、中世大友府内町跡の推定府内町に比定されている調査地点（第14次調査）でも確認されている。

埋没状況は、井戸枠検出面から一気に埋め戻されており、その埋土の下部は漸次的に鉄分の沈着が認められる。この最下部では完全に鉄分が固着した層となり、厚いところでは20cmを測る。この鉄分層の下には、グライ化した青灰色粘質土が堆積し、ここから漆器椀・下駄をはじめとする木製品や木片が出土している。さらに井戸枠中央付近からは和鏡（菊花及鳥文鏡）が出土している。周囲には小形の曲物が確認できるが、鏡との関係は不明である。しかしながら青灰色粘質土の上部で鏡を検出していることから、この鏡は井戸の廃棄前の井戸祭祀に用いられた可能性も考えられる。

井戸跡以外の遺構としては、焼け石や炭化物を多く含んだ廃棄土坑などの土坑群が確認できる。（SK010・025・031・065・069・085・098）これらの土坑群は、庭園跡に並行するかたちで並んで検出されており、庭園廃絶後もこの

場所がなんらかのかたちで、意識されていた可能性を指摘できる。

出土遺物

【Ⅰ期】

当該時期の出土遺物としては、ロクロ成形された土師器・小皿類が大半を占めている。第13図1～21はⅠ期のSB050・SB145・SD030・SD060・SK086から出土した土師器・小皿である。小皿の法量は口径平均約9cmを測り、高さは約1.0～1.6cmを測る。口縁部端部を丸くおさめるもの(1.3.6.7.9.12)や尖り気味になるもの(2.13.14)、底部から開き気味に立ち上がるものや垂直に立ち上がるものなどバリエーションが認められる。杯の法量は約12～15cmを測り、高さは約3～4cmを測る。小皿同様にいくつかのバリエーションがある。底部から口縁部にかけて立ち上がるもので、底部から胴部下半に二次調整が行われているもの(17)、底部から胴部下半に段をもって口縁部に立ち上がるもの(11)、底部からそのまま直線的に立ち上がるものなどがある(5)。口縁部も端部を丸くおさめるものや口縁部外面を強くナデルことによりシャープになるものなどがある。杯の大きな特徴としては、胴部中位付近で器壁がもっとも厚くなることがあげられる。数量はやや少なくなるが、土師器小杯も出土している。法量は約9.2cmを測り、高さは約1.7cmを測る。底部端からそのまま口縁部にやや開き気味に立ち上がる(16)。また、小皿に長脚を付け、底部の中央を穿孔しているものも出土している(10)。その他、図示していないが、白色系の土師器片が数点出土している。

第1図6～8はSB145の柱穴を切っているSP020から出土した土師器・小皿である。柱穴の裏込めに充填されていた一括資料であり、同タイプの小皿が20数個確認され、杯は1点のみであった。SB145の下限を知る重要な資料である。また、SB050の柱穴が切り込んだ遺構からは、龍泉窯系青磁Ⅱ類や白磁碗Ⅲ類などが出土しており、建物の上限を考える上での参考となる。これらのⅠ期の資料は概ね15世紀前半に位置付けられる。

【Ⅲ期】

当該期の出土遺物には、薄手の京都系土師器と内面に深い溝状の成形痕跡を残すロクロ成形土師器がある(第13図22～39)。京都系土師器が主体となるが、ロクロ成形土師器も一定量出土している。京都系土師器では、口縁部にいくつかのバリエーションがあり、それぞれのタイプごとに各法量分化が認められる。手づくね成形により作られており、器面には指押えの痕跡が顕著に認められる。中にはへら状の工具によるものと考えられるケズリ風の痕跡も認められる。内面には「2」の字状・「の」の字状の最終調整も観察でき、丁寧なつくりである。

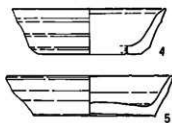
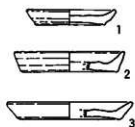
ロクロ成形土師器は、Ⅰ期のものに比べると口径に比して、底径が小さく底部から口縁部に大きく開く特徴的なものであり、器高も低く皿形を呈する。口径約11.6～11.8cm、底径約6～7cm、高さ約2.5cmを測り、現状では同一法量のものが出土している。

この段階の出土遺物のほとんどが、いわゆる「かわらけ」であり、館内での当地の位置付けが示唆される。Ⅲ期の時期については、出土している京都系土師器から16世紀中葉から後葉、庭園路が機能していた時期に比定される。

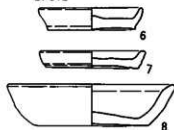
【Ⅳ期】

当該期の出土遺物には、厚手の京都系土師器や中国染付・白磁・朝鮮陶磁、備前焼摺鉢、瓦質鉢などが出土している。京都系土師器主体であったⅢ期に比べると、京都系土師器の出土量は少なくなり、摺鉢、瓦質鉢など日常雑的な器種が増えている。出土した遺構も井戸跡や廃棄土坑など日常的なものと言える。出土した備前焼には、摺鉢(第14図8・9・15、第15図8)の他、花入(第15図7)や口縁部外面に沈線をもつ鉢(第14図7、第15図12)、水屋甕(第14図14)なども出土している。

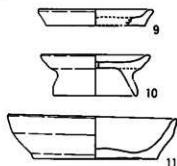
Ⅰ期
SB050
SB145



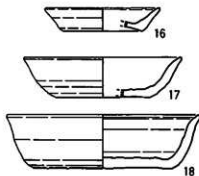
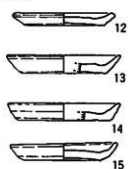
SP012



SD030



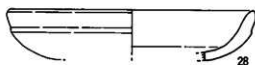
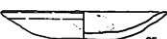
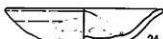
SD060



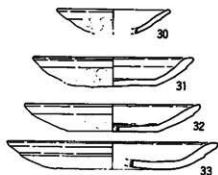
SK086



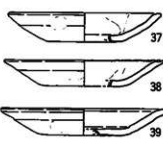
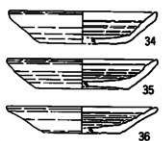
Ⅲ期
SX093



SX099



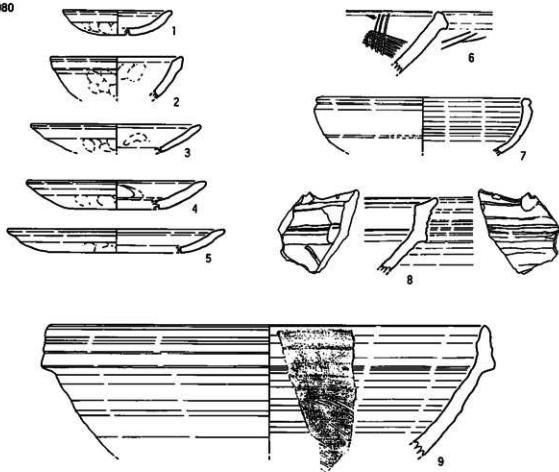
SX202



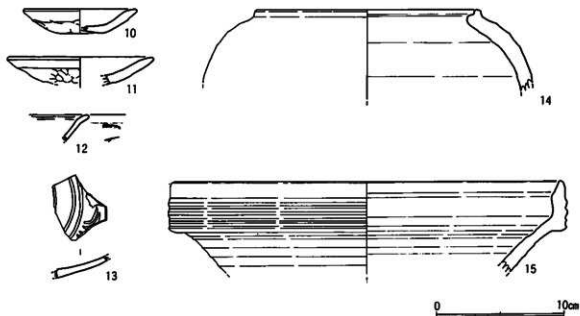
0 10cm

第13図 Ⅰ期・Ⅲ期出土遺物 (1/3)

SE080

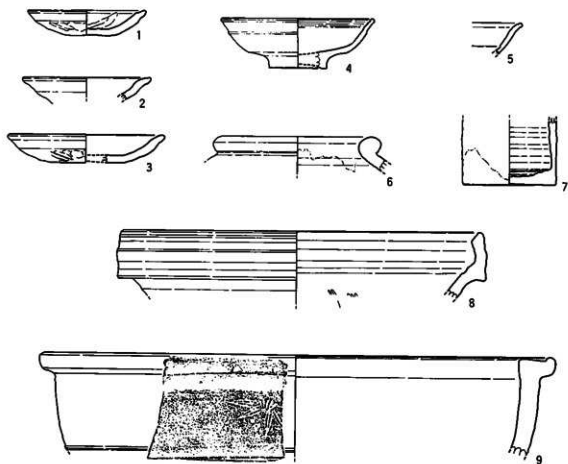


SE026

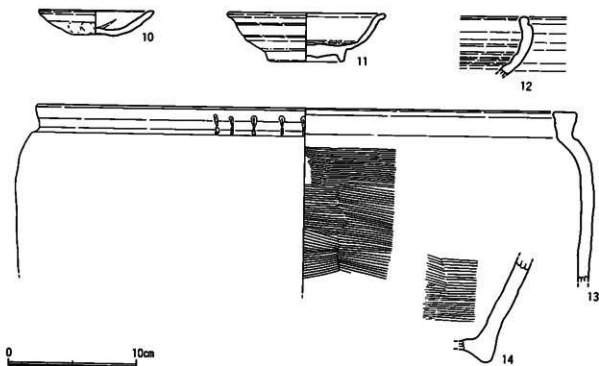


第14圖 IV期出土遺物 ① (1/3)

SE024



SK025



第15図 IV期出土遺物 ② (1/3)

Ⅳ期の資料の多くは廃棄時の遺物であり、各遺構間で接合するもの、あるいは明らかに同一個体とみられるものなどが確認できる。第15図11はSK025出土の白磁碗（E群）であるが、口縁部はSE080の最終埋没土と考えているSX056出土の資料と接合しており、SE024の黒灰土の中からも同一個体とみられる口縁部片（第15図5）が出土している。

SK025とSE024では同一個体とみられる破片が多くみられ、第15図13・14の瓦質鉢も、SE024出土の瓦質胴部片と同一個体と考えられる。さらにSE024の第15図9の土師質鉢の口縁部は、SK085の第16図10の底部と同一個体と言える。この他にも遺構間接合がみられ、この接合関係を詳細にみていくことにより、当該期における各遺構の変遷がたどられる。

土器以外の出土遺物に、SE026青灰色粘質土から出土した和鏡「菊花双鳥文鏡」（第11図1）がある。直径8.9cm、厚みは0.2cmを測る。周縁の高さは0.85cm、幅は約0.5cmを測り、外区・内区とも約1.5cmを測る。鈕座は亀形鈕で表面には六角形の花亀甲文が描かれ、1つの亀甲文の中には花文が退化したと考えられる珠文がわずかにみられる。内区には、亀の上方に2羽の鳥が互いのくちばしと亀の頭を接するようにして配置されている。その周りに菊文が均等に散りばめられている。外区は3重になっており、外側に退化した幅線文帯、中央には3つの点で構成された文様が一部つづれているが、12等分するように均等に配置される。内側は珠文帯となる。このような外区を幅広くとり、珠文帯などを重ねてめぐらすといった、中国・漢代の鏡を模した和漢折衷様式の鏡は「擬漢式鏡」と言われ、14世紀ごろから16世紀ごろまでみられるものである。内区の花亀甲文や散らし文、鈕上方で向かい合って飛ぶ双鳥文なども14世紀に一般化する意匠であるが、当資料の場合、各文様がかなり退化しており、こうした和鏡の中でも新しく位置付けられ、16世紀代のものと考えられる。この他、SE026からは第11図2の漆器碗や下駄、曲げ物、SE024からは不明金銅製品なども出土している。

Ⅳ期の時期については、各遺構から出土している京都系土師器、中国染付皿（E群・F群）、備前焼鉢鉢（Ⅴ期）などから16世紀末葉に位置付けられる。

その他遺構の出土遺物

【SX040】

第17図1～7は水田跡の古い水田層から出土した遺物である。1は初期伊万里皿。全体に淡い軸調を呈し、高台には砂が付着している。3は唐津皿。見込みに2ヶ所砂目積みの痕跡がみられ、そこには漆が付着している。2は唐津鉄絵皿。口縁部は輪花風になり、口縁端部内面に厚く鉄軸がみられる。5は唐津碗。外面にハケ目がみられる。6は唐津鉢。口縁端部は無軸で内外面に白泥軸が施軸されている。この水田層の出土遺物において一番新しいものは、4の陶胎染付碗であり、18世紀前半にはこの地が水田化されていたと考えられる。しかしながら、出土遺物には初期伊万里なども含まれており、この時期まで遡る可能性も考えられる。

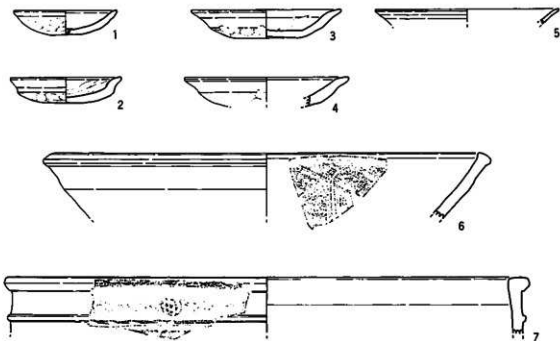
【SX096】

第17図18は土師器杯。底部はへう切りで、直線的に口縁部にのび、口縁端部で短く外反する。色調は黄褐色を呈し、器面はナデ調整である。概ね9世紀中葉に位置付けられる。第4面とした黄灰色土層から出土した遺物で、5個体が重なったような状態で出土している。

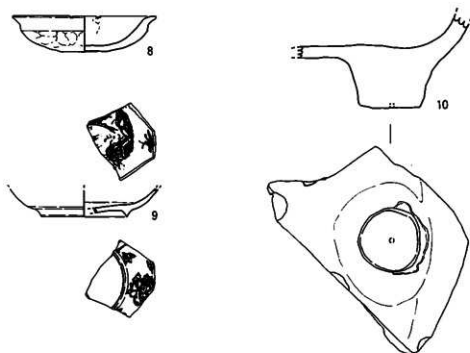
【茶灰土】

第17図8～12は、第1面を形成している整地土出土の遺物である。9～12はロクロ成形された土師器杯・小皿・小杯・脚付小皿などである。出土する遺物のほとんどが、こうしたロクロ成形された土師器類であるが、8のような厚手の京都系土師器片や肩部に波状沈線をもつ備前焼鉢（Ⅴ期）なども出土しており、この整地の時期を16

SK065



SK085

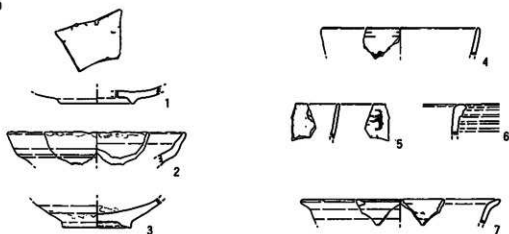


SK098

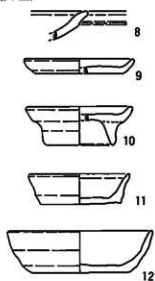


第16図 IV期出土遺物 ③ (1/3)

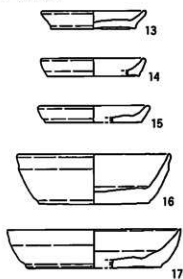
SX040



茶灰土 (第1面)



灰褐土 (第2面)



SX096



0 10cm

第17図 その他の遺構出土遺物 (SX040・SX096)・茶灰土・灰褐土 (1/3)

世紀の後葉から末葉に考えておく。

【灰褐土】

第17図13～17は、第2面を形成している整地土出土の遺物である。この面にⅠ期の遺構群が切り込んでいる。出土遺物のほとんどがロクロ成形された土師器・小皿類である。この他時期は若干古くなるが東播の鉢や甕、亀山の甕などの広域流通品なども出土している。

小 結

今回の調査は、庭園跡機能時の北側の状況把握を一つの目的として行い、調査の結果、一定の成果が得られた。さらにその前後の状況を示唆する調査所見も得ることができた。以下、そうした調査所見について記しておく。

北区において4面の整地層を確認。第1面—16世紀後葉から末葉、第2面—15世紀前後、第3面—不明、第4面—9世紀中葉。実際に遺構が形成されるのは、第2面のみであり、第1面では当該期の遺物がほとんど出土しないことや遺構が無いこと、さらに推定門跡の周辺であることなどから空閑地—広場的な位置付けを指摘した。しかしながら、第2面の遺構の状況から、いくらかこの面も削平を受けている可能性があり、16世紀代の遺構が同じ削平されている可能性も考えておく必要がある。当調査区内では上記のような状況がみられたが、今後、東西北側の調査に期待される。

北区南側から南区にかけて18世紀前半以降のSX040水田層を確認。このSX040のプランは、明治初期の地籍図にみられる地割に合うかたちで確認された。これにより庭園跡が検出された調査地については、大部分が削平をうけていることがわかり、庭園跡に付随する遺物などについては、すでに失われている可能性が高いと考えられた。SX040の下部水田層からは初期伊万里皿や砂目縞の唐津皿なども出土しており、この時期の遺構がどのように展開するか今後の調査に期待したい。

今回の調査においての最も大きな成果として、出土遺物・遺構の切り合いからⅠ～Ⅳ期の遺構変遷が確認できたことがあげられる。

Ⅰ期は約3°東に振れる掘立柱建物跡群で、Ⅱ期は1°～2°東に振れる掘立柱建物跡群である。Ⅰ・Ⅱ期とも大友氏館跡が方二町に拡張される以前のきわめて規格性の高い建物群であり、こうした建物群がこの地区にあったという重要な所見が得られた。しかしながら、現状ではこれらの建物群が大友氏館、すなわち当該期の守護所に関わるものであるのかどうかについては不明である。また、Ⅰ期の建物群については、かなりの被災をうけて廃絶したと考えられる。この時期以後では、大友氏の家督争いが相次いでおり、あちこちが戦火にみまわれている。当該建物群もこうした流れの中で灰と化したのだろうか。いづれにしても建物群の展開、上屋の構造、現地表の削平の否など今後の課題は多い。

Ⅲ期は庭園跡が機能していた段階の遺構群である。SX040の落ち際から南側に遺構が展開しており、後々この場所に水田がつくられる要因に庭園跡との関わりが推定される。庭園跡の東側には、遮蔽施設としての欄跡や樹木痕などが確認されている。先に記したようにこの段階、北区には遺構は検出されない。

Ⅳ期は庭園跡が機能しなくなった後の段階にあたる。井戸跡など日常的な遺構が出現し始めるとともに、出土遺物の組成にも変化がでてくる。それまでかわらけ（土師器）が主体として出土していたが、この段階になると瓦質の鉢や播鉢などの雑器類が多くなっていく。このことから土地利用に変化があったことを窺い知ることができる。

以上のように今回の調査では、大友氏館の成立や衰退に関わる重要な所見が得られたといえる。



庭園跡周辺調査区全景（デジタル合成）



大友氏館跡 第12次調査区全景

図版 2



SX040 検出時（東から）



SX040 土層観察時（東から）



SX070 半載時（東から）



SD030・SD060 検出時（北から）



SP020 遺物出土状況（南から）



SB050 柱痕検出時（南から）



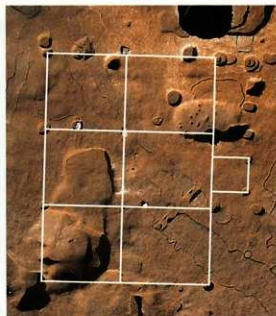
SB050 礎パン石検出時（南から）



SB145 土層観察時（北から）



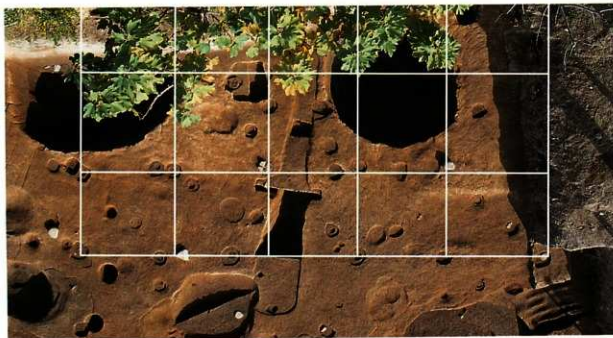
SB145 (南から)



SB035 (南から)



SB050 礎パン石検出時 (北から)



SB050 (南から)



SE026 水溜検出時（南から）



SE026 鏡出土状況 ①（南から）



SE026 鏡出土状況 ②（南から）



SE026 漆器椀 下駄出土状況（南から）



（表）



（裏）



SE026 出土「菊花双鳥文鏡」

2. 中世大友府内町跡第23次調査

調査体制

調査主体 大分市教育委員会 調査指導 大分県教育委員会

調査担当 坪根伸也・菊谷史穂

発掘調査従事者

麻生咲子・井上弘美・江藤和子・大石妙子・高橋美佐子・竹中房子・田中一崇・中野めぐみ・
広瀬敬子・古川一郎・松井千代子・綿丸るみ子・玉井秀和・内山ツネ子・大山末喜・川野久明・
霍間幸子・友田スイ子・宮迫喜久雄

調査区の設定

中世大友府内町跡第23次調査区は、大友氏の菩提寺であった禪宗寺院万寿寺推定地内にあり、かつて九州乳業株式会社の工場が存在した地域に相当する。

今次の調査は、重要遺跡確認調査として、九州乳業工場跡地における万寿寺跡の遺跡状況の確認を主たる目的とし実施した。調査は、対象地域内に第18図に示した位置に調査トレンチを設定し行った。

調査概要

調査の結果、九州乳業工場の旧建物の中でも建物基礎の規模や深度に差異が認められ、建物があつたにもかかわらず遺跡の遺存状況が良好な部分と、建物基礎の埋設や除去の際に掘削が遺構確認まで達し、破壊を受けている地点に明瞭に分別できそうである。

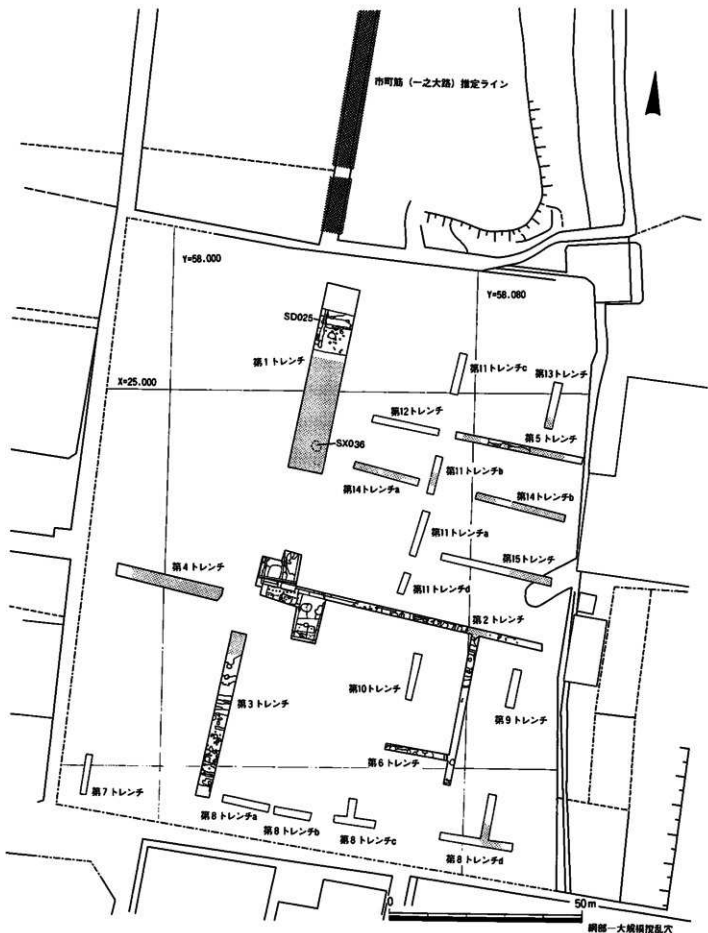
また、後者においても遺構が掘削穴群の間に島状に分布している状況が看取され、遺構の遺存状況は総じて良好である可能性が高い。

最も遺跡破壊の顕著な部分は、第1トレンチ南側の本体工場部分と第4トレンチに重なる部分に集中する。調査対象地内の北西と南東部に関しては今後の調査に期する部分が多いものの、工場作業時には低平な建物群があつたことが知られ、今回のトレンチ調査状況から、遺構が比較的良好に残っている可能性が指摘される。

基本層序

遺構には万寿寺の創建段階である14世紀のものから、最終段階の16世紀のものがあり、さらに14世紀の遺構が検出される地点では、部分的ながら9世紀前後のものと推定される整地層が確認できるエリアもある。つまり、遺存状況の良好な地点での基本層序は、おおむね以下のように示される。

- 第1層 砕石＋濁黄茶褐色土の混土層 工場建設時および撤去時の客土層
- 第2層 暗灰色粘質土層 水田土層（工場建設前の水田土層）
- 第3層 暗茶褐色土層 16世紀後半以降の整地層（SX060）
- 第4層 黄茶色土層 16世紀後半の整地層（SX065等）
- 第5層 暗灰褐色砂質土層 14世紀代と推定される整地層
- 第6層 暗黄茶色砂質土層 9世紀代と推定される整地層（ごく薄く、部分的に認められる。）



第18図 調査トレンチ配置図（1/1000）

各トレンチの概要

調査対象地内のトレンチ配置は第18図の通りであるが、第1トレンチから第5トレンチについては、最上位に位置する文化層上面において遺構検出を行い、なかでも第1・2トレンチについては一部の遺構について掘り下げを実施している。これに対して、第6から第15トレンチは遺跡の遺存状況の把握を第一義とし、擾乱穴の位置確認を主たる目的としたため、詳細な遺構確認作業は行っていない。

第1トレンチ

第1トレンチは、九州乳業工場跡地（推定万寿寺跡地）内の北側中央部に設定した。南北約50m、東西約10mの計約500㎡を対象とする。機械力により九州乳業工場の旧建物撤去時における碎石客土を除去し、表土剥ぎを行った。その結果、トレンチ南側から約3分の2を占める範囲内において、旧建物基礎部分の埋設、及びその除去に伴う擾乱穴を10ヶ所ほど確認することができた。各擾乱穴はその規模や深度に差異があり、そのため、小規模な擾乱穴の底面では遺構を確認できる部分がある。一方、擾乱穴による破壊を免れたトレンチの約1/3を占有する北側では、古代・中世に比定される遺構・遺物の面的な展開を認めることができた。

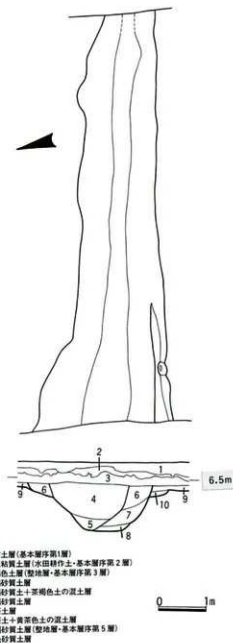
本地点の基本土層は、約0.45mの碎石客土直下に水田耕作土が存在し、その下位に暗茶褐色砂質土を基調とする整地層が存在する（基本層序第3層に相当か）。なお、本トレンチでは、同整地層に伴う遺構・遺物は認められていない。また、本層は上部の削平のため、トレンチ全面に均一な分布状況を示さず、部分的に分布する。特に東側部分の欠失が顕著であり、整地層の平面分布の把握は困難である。最終的な遺構検出作業は本層下位に存在する暗灰褐色砂質土を基調とする整地層（基本層序第5層に相当か）のさらに下層に該当する黄茶色砂質土層上面で行った。当該層は本地点における基盤土となるものであり、部分的に基本層序第6層に相当する整地層が認められ、検出面では、第5層および第6層と推定される整地層が竊状に展開する状況を看取することができる。

以下、第1トレンチの主要遺構について概説する。

SD025は、トレンチ北側で検出した溝状遺構である。



第19図 第1トレンチ北側部遺構検出状況（西方向から）



第20図 SD025平面・土層断面実測図（1/80）

検出面での最大幅約2.0m、トレンチ内での長さ約8.50m、深さ約1.0mを測る。主軸方位はN-80°-Wを示し、断面形状は下層壁面が丸みを帯びる略台形を呈する。また、数回の掘り返し痕跡が認められた。出土遺物には、須恵質土器片が若干認められ、瓦質の播鉢・甕などがこれに混在する。また、埋土内からは瓦や鉄滓・鉄釘の出土も認められた。本遺構は、出土土師器や瓦器塊(第35図・8)の年代観から、14世紀中頃～末には埋没していたと推定され、徳治元年(1306)に建立されたと伝えられる万寿寺の創建段階に極めて近い時期に機能していた遺構である可能性が高い。

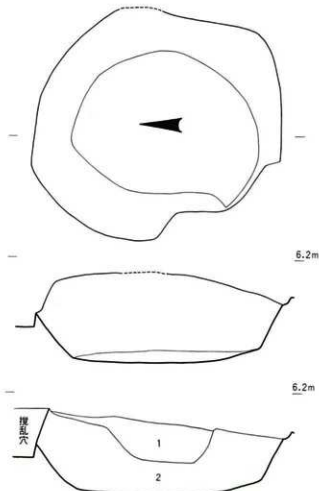


第21図 SD025発掘状況(西方向から)

SX036は、トレンチ南側部分で検出した土坑である。検出面での径約2.4m、深さ約0.8mを測る。遺構埋土は砂質土を主体とし、掘り返しによる埋土と考えられる上部層と下部層に二分される。下層埋土は上層に比して砂質が強く、軟性で明度が高い。下層埋土は土層状況から自然堆積によるものと推定され、上部埋土を有する掘り返しは、下層埋土堆積途中において、中央が窪み状の状態時に実施されたものと推定される。なお、遺構の性格に関しては現状では不明である。出土遺物は概して少なく、形態等を把握できる資料は極めて少量である。ただ、中国南部産と推定される玉縁形状を呈する焼締陶器の鉢口縁部小片(第34図2)が認められ、当該資料の存在から、16世紀後半の所産である可能性を想定できる。

他に、トレンチ南東部分においてピットを2基検出した。双方とも遺構の北半部に関しては削平を受けており、南半部のみが残存していた。現状での推定径約0.15～0.30m、深さ約0.25m前後を測り、埋土は暗茶灰褐色砂質土の単一層である。なお、遺物は出土しておらず、所産時期の特定には至っていない。

以上が第1トレンチの様相である。九州乳業工場の旧建物跡に伴う大規模な掘乱穴を除いては、遺存状況は比較的良好で、14・16世紀の両時期に比定される遺構を確認することができた。さらに、古代(9世紀)に比定される整地層(基本層序第6層)の分布も把握することができ、当該地の開発初現を考究する際の貴重な資料を得ることができた。



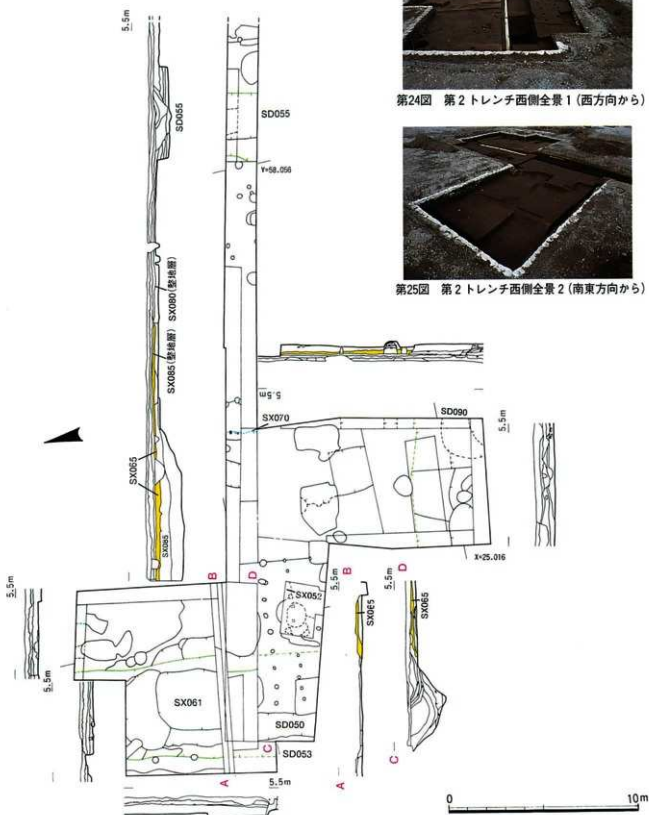
1. 淡褐色茶褐色砂質土
2. 淡灰茶褐色砂質土

0 1 m

第22図 SX036平面・断面・土層断面実測図(1/40)

第2トレンチ

第2トレンチは工場跡地のほぼ中央に設定した



第23図 第2トレンチ西側遺構配置・土層断面実測図 (1/200)



第24図 第2トレンチ西側全景1 (西方向から)



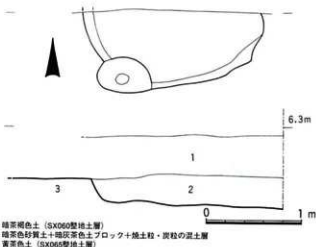
第25図 第2トレンチ西側全景2 (南東方向から)

東西に長い調査区である。調査期間後半にトレンチ西側部を南・北両方向へ拡張した。

本トレンチの基本層序は第1トレンチと同様に碎石客土直下に水田耕作土が存在する。碎石客土は約0.35m、水田耕作土は約0.25mの層厚を有している。基本層序第1・2層に相当するこれらの下位に基本層序第3層に相当する整地層(SX060)が認められる。本層は調査区のほぼ全面において確認することができるが、層厚は地点により大きな差異があり、東側に比して西側部分の方が明らかに厚い。また、本層の上部層は上位の水田耕作土の耕作時があるいはそれ以前の耕作に伴うと推定される耕作痕が認められ、上部は攪拌を受けている部分がある。この点についても明確に分別できる箇所と困難な箇所があり、層上部からの出土遺物の層属には慎重を期す必要がある。

ちなみに、本層(SX060)は、後述するSX052を被覆していることから、16世紀後半以降の所産になることは明らかであるが、その下限については、層下部から明確な包含遺物の出土が認められないため、現状では明言することはできない。唯一一点のみの出土であるが、層中位から志野焼の小片が出土しており、整地層の所産年代を慶長期以降のものであるとする可能性も残すが、攪拌部との分別が確実視されている部分からの出土ではないため、なおも慎重な判断が必要となろう。SX060の下位には16世紀後半のものとして推定される整地層(SX065)を確認することができる。SX065は調査対象地全域に分布するのではなく、第2トレンチ西側部を中心に確認することができる。当該層は黄茶色土を基調とするもので、積み土風に固く締められており、第2トレンチ西側部の層下位には掘り込み地業を伴うSX080やSX070が認められる。一方他の地点での層下位は黄白色シルト質土となり、当該地点の基盤土を構成している。

整地層ならびに検出遺構の掘り下げに関しては部分的な実施にとどめているため、検出遺構は必然的に最新の16世紀のものが中心となる。



第26図 SX052平面・断面実測図(1/40)



第27図 SX052遺物出土状況(南方向から)



第28図 SD053土層断面(北方向から)



第29図 連続土坑(SX061等)検出(北西方向から)

16世紀後半に比定される遺構には、SX052やSD053、SD090、SD055などがある。

SX052は整地層（SX060）の下位、ならびに整地層（SX065）の上部において確認される土坑である。本遺構は、攪乱穴の底面において南半の約1/2を検出し、北半部はSX060下に包蔵される。掘り下げは攪乱穴底面での検出部について実施した。調査の結果、SX060下面からの遺存深度は0.32mと浅く、SX060施工時に上面の削平が行われた可能性を示唆している。現状での埋土は暗茶色砂質土の単一土層であるが、底面に薄い灰層の分布が認められた。出土遺物には器表面に貫入が認められる青磁片、完存する京都系土師器皿が底面灰層中から出土した。16世紀後半に比定されるものである。完掘していないこともあり、遺構の詳細な性格は不明であるが、積み土風の造作がなされる整地層（SX065）の上面に構築されており、その構築目的物に伴うものである可能性が高い。

SD053は調査区西側部で検出した断面U字形を呈する溝状遺構である。検出面での幅5.3m、深さ2.0mを測り南北方向へ展開する。溝埋没後についても径2.0m程度的大型土坑列（SX061等）によって溝構築時の区画を踏襲している状況が看取される。これを便宜上「土坑連続形区画」と呼ぼう。土坑内部には瓦や小礫を含むものもあり、遺物出土状況については、溝形態を呈するSD053埋土内の状況と大きな差異はない。また、積み土状になると推定される整地層（SX065）はSD053と接する部分で溝の掘り方に沿うようなカーブを描くように積み土されており、明らかに溝機能時に施工されたことを示している。SD053、SX061からの出土遺物には、中国染付皿（B₂群）、京都系土師器皿（16世紀後半）、備前焼捕鉢片、凝灰岩製の五輪塔空風・地輪、花崗岩製の手水鉢片などの他、10点程の鉄釘の出土も認められている。

SD090は南側拡張部壁際において検出された東西方向に展開すると推定される溝状遺構である。底面までの掘り下げは実施していないため詳細は不明であるが、遺構の埋土状況、「土坑連続形区画」状況などSD053との類似点が多く、同種の遺構である可能性が高いと推定される。また、この両者に囲まれると考えられる範囲に整地層



第30図 SD090検出状況（南方方向から）



第31図 SD055土層断面（南方方向から）



第32図 SX070遺物出土状況（西方向から）



第33図 SX070土層断面（南東方向から）

(SX065・085)が存在し、その外側には同様の整地層が確認されない点を大きな特徴とする。出土遺物には、瓦片や土師器片の他、金銅製の棒状金属製品(第34図1)が認められた。明確な所産年代を示す遺物の出土は認められないものの、SD053と同時並存すると想定される整地層(SX065)から京都系土師器皿(第36図16-17)や瀬戸美濃産の天目茶碗高台部片、多くの鉄釘などが出土しており、およそ16世紀後半の機能年代を推定することが可能である。

SD055はSD053の東31.5mの地点で検出した南北溝である。複数回の掘り返し痕跡が認められるが、最も規模の大きな段階のもので幅3.14m、深さ0.8mの規模を測り、SD053等に比して小規模ではあるが、SD053の東肩部から続く若干の掘り込みを伴う整地地業(SX085・SX080)がこのSD055を境として終息するという点を特徴とする。これは、SD053、SD090と同様の状況を呈しており、三者の密接な関係を示している。つまり、これらの点は、溝に囲繞された30m程度の方形空間が存在し、その内部に掘り込みを伴う整地地業が行われた可能性を想起させるものである。このような想定を裏付けるように、SD053の北側延長線上に位置する第1トレンチでは、SD053の延長は認められておらず、前述した整地状況から東側へ屈曲し、方形空間を形成する蓋然性は高いと言える。SD055についても、南側延長線上に相当する第6トレンチにおいて、延長部は確認されておらず、西側への屈曲、もしくは終息する状況が考えられる。

ところで、想定囲繞空間の西南付近に相当する部分では、積み土になると想定される整地層SX065が分布するが、この下部には10m近い幅を有する大規模な掘り込み(SX070)が確認されている。現状GLから底面までは約1.8mを測り、底面近くには灰層の広がりが認められ、その直上からは瓦や土製磚、青磁碗などが比較的多く出土している。上部面に16世紀後半段階、およびそれ以降と推定される複数の整地層が存在するため、平面プランの把握は現状ではおこなえないが、想定した方形空間を直接的に意識した配置とはなっていないものと推定される。出土する青磁碗は14から15世紀に比定されるものであり、当該期の所産となる可能性もあるが、SX070の上部埋土の上面はSX085施工時に窪んでいたことが土層の断面観察から判明しており、あるいは近接する時期(16世紀後半)のものである可能性も考慮されよう。ちなみに掘り下げ範囲は狭小だが、今のところ確実に16世紀代に比定される遺物の出土は認められていない。出土遺物には他に中期瀬戸黒釉壺片(第34図3)、強い2次被熱を受けた瓦片、鉄釘などがある。

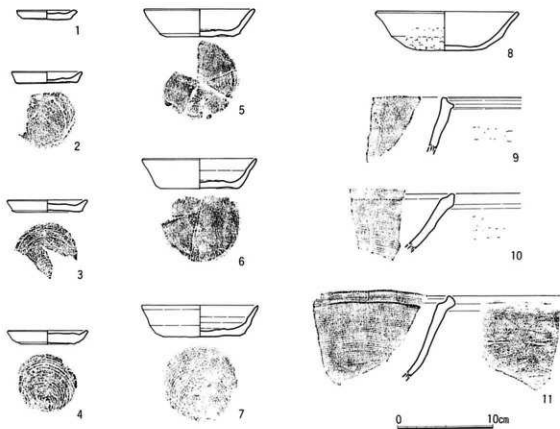


第34図 出土遺物

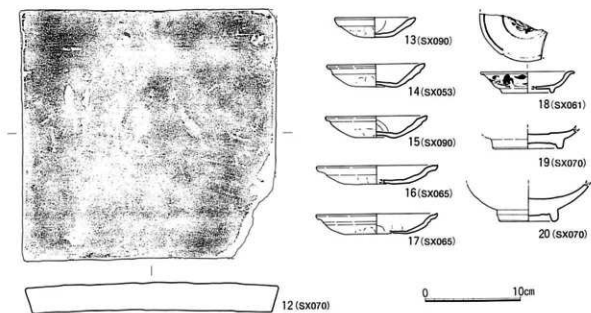
第3トレンチ

第3トレンチは、九州乳業工場跡地(推定万寿寺跡地)内の南西部に設定した。南北約44m、東西約4mの長方形を呈する176㎡の調査区である。本トレンチは、基本土層、及び遺構の遺存状況の把握を目的として調査を実施した。そのため、遺構の平面検出と、壁面における土層観察を主に実施し、写真撮影、及び図面による記録の作成を行った。

トレンチ北端～南側約10.0mの範囲内は、九州乳業工場の旧建物基礎部分に相当する大規模な掘乱穴が認められ、遺構は欠失する。これに対して他の部分は掘乱深度が遺構面まで達しておらず、遺存状況は概して良好である。当調査地点の堆積土層は、九州乳業工場の旧建物解体後における砕石客土が約0.60m堆積し、その下位は、水田耕作土である。耕作土は、約0.20～0.30mの層厚を有し、この直下が遺構確認面となる。なお、遺構確認面は整地層の上面に該当することになるが、現状では本整地層が基本層序のいずれの整地層に相当するものであるのかは不明である。ただし、16世紀後半以降と推定される第3層土、あるいは16世紀後半代に比定されている第4層土とは明らかに異なっている。



第35図 SD025出土遺物実測図 (1/4)



第36図 出土遺物実測図 (1/4)

検出遺構には、東西方向に縦走する溝状遺構が7条あり、比較的大形で、円形（推定）プランを呈すると思われる遺構が7基あり、ピット数十基などがある。なお、これらの遺構には切り合い関係をもつものがあり、検出面での遺構掘土にも差異が認められる。これらの点から、検出遺構には複数時期のものが存在しているものと推定される。

第4トレンチ

第4トレンチは、調査対象地域内の西側、南寄りに設定した東西方向に長い調査区である。南北約3.0m、東西約28.0mを測り総面積85㎡となる。本トレンチは、東隣に設定した第2トレンチの遺構確認面と同一レベルまで重機による表層の除去を試みたが、九州乳業工場の旧建物跡基礎部分に相当する大規模な掘乱穴が認められ、トレンチ内全域で遺構を確認することはできなかった。

第5トレンチ

第5トレンチは、調査対象地域の東北エリアのほぼ中央に設定した。南北約2.0m、東西約33mの計65㎡を対象とする。本トレンチは、第3トレンチと同様に、土層堆積状況、及び遺構の遺存状況の把握を目的として調査を実施した。その結果、トレンチ西端～東側約5m、同東端～西側約10mの範囲内で、九州乳業工場の旧建物跡基礎部分に相当する大規模な掘乱穴が認められ、遺構が破壊されている状況を確認した。上記範囲外に相当するトレンチ中央部は、建物解体時における砕石客土層は認められたものの、その深度が比較的浅く、遺構への影響は小さい。

堆積土層は、九州乳業工場の旧建物解体時における砕石客土が約0.2m堆積し、その下層には、鉄分沈着層を下部に有する水田耕作土が約0.2m程度認められた。さらに、その下位において3面にわたる整地層を確認することができた。水田耕作土直下の整地層は基本層序第3層（SX060）に相当するものである。ただし、上部層を構成する砕石客土による掘乱や、水田構築に伴う削平により、トレンチ南壁の東西約1.50mの範囲内に約0.20m遺存しているのみの状況であった。その下層に相当する整地層は、微小の淡黄白色・褐色粒子を多く内包し、非常に締まりのある砂質土である。トレンチ北壁面において約0.20m、南壁面では約0.10mの堆積を確認した。なお、南壁土層観察の結果、この整地層上面から掘削される遺構を数基ではあるが確認した。上面幅が約0.25m深さ約0.10～0.15mを測り、淡灰茶色砂質土を呈する単一層の遺構である。さらに下層に相当する整地層は、トレンチ北半部で確認することができる。基本層序第5層に相当するものであろうか。淡茶灰色を呈し、上部の整地層に比して砂質も強く締まりもあるが、やや軟質である。また、内包する粒子も少量である。なお、平面精査において、この整地層に後出する遺構が認められた。

第6トレンチ

第6トレンチは、調査対象地内の東部地域南寄りに設定した調査区である。トレンチ形状はL字形を呈し、便宜的に南北トレンチと東西トレンチと呼び分けている。トレンチ北端部は、第2トレンチ東側の、九州乳業工場の旧建物基礎部分に伴う大規模掘乱穴南壁に接続し、南北約40.0m、東西約2.0mを測る（第6南北トレンチ）。さらに、このトレンチの南側西壁に接続して、南北約2.0m、東西約17.0mのトレンチを設定した（第6東西トレンチ）。なお、本トレンチは、第3～5トレンチと同様に、堆積土層、及び遺構の遺存状況の把握を目的として調査を実施した。また、九州乳業工場の旧建物跡に伴う掘乱の状況は、旧建物解体時における砕石客土は認められたものの、掘乱深度が比較的浅く、遺構確認面までは及んでいない。したがって、大幅な遺構破壊は認められず、遺構の遺存状況は極めて良好である。

堆積土層は、九州乳業工場の旧建物解体時における砕石客土を除去した段階で、約0.15～2.0mの水田耕作土の堆積を認めることができる。基本層序第3層に相当する整地層SX060は、第1・2・5トレンチと同様に耕作土

直下で確認することができる。ただし、遺存深度は、約0.05～0.25mと地点により大幅に差異が認められる。また、分布状況に関しても、確認できる地点と、欠失する部分とに明瞭に分別できる。これは、上部層に相当する碎石客土の敷設、及び水田耕作に伴う削平に起因すると考えられる。確認できる地点は、南北トレンチと東西トレンチとが接続する地点から、南側部分の壁面と、東西トレンチの南北トレンチと接続する地点の南壁面である。なお、本トレンチでは、整地層（SX060）の上面から掘り込まれる遺構の存在が確認されている。

整地層（SX060）に後出する遺構は、トレンチ壁面の土層観察による所見を含めて、7基＋α確認された。南北トレンチでは、推定で径約1.50mを測る、円形の比較的大型の遺構を検出した。東西トレンチでは、壁面の観察から、推定での上面幅が径約0.35m、深さ約0.20mを測り、暗茶灰色土を主体とする埋土に、微細の隙を多く内包する遺構が認められた。他に、上面幅が約6.0mを測る大型の遺構も確認している。ただし、上部層は、上層の耕作土により削平され、遺存深度は約0.20m前後である。遺構埋土は、淡灰茶色土に淡茶黄色ブロックを内包し、軟質である。また、この遺構の中央部では、前述した遺構上面から掘削される遺構が認められた。上面幅は約2.4mを測り、埋土はやや暗い灰茶色を呈し、軟質である。

整地層（SX060）に先行する遺構は、トレンチ壁面の土層観察による所見を含めて、5基＋α確認された。南北トレンチでは、南端部において、暗灰茶褐色土を主体とし、硬質な埋土を有する遺構を検出した。また、この遺構に近接して、柱痕跡を伴う柱穴を確認した。この柱穴の所産年代は不明だが、前記した遺構の埋土と非常に酷似している。東西トレンチでは、炭化物や、土器を内包する遺構が確認されている。なお、残念ながら今回の調査では遺構の掘り下げを実施しておらず、明確な時期比定は行えなかった。

第7トレンチから第15トレンチ

第7トレンチから第15トレンチに関しては、遺跡に対する視乱部の影響度の確認を主目的に設定し、現状で調査の実施できなかった調査対象地域の北西エリアを除く全域をカバーするような形で場所を選定した。調査により確認することのできたトレンチデータは下記内容によって示される。

トレンチ番号	トレンチ面積(㎡)	視乱穴個数	大規模視乱面積(㎡)
第7トレンチ	17.5589	0	
第8aトレンチ	22.9449	4	
第8bトレンチ	20.4818	2	
第8cトレンチ	32.588	1	
第8dトレンチ	63.5688	2	12.3129
第9トレンチ	21.9865	1	
第10トレンチ	24.4737	2	
第11aトレンチ	21.6448	1	
第11bトレンチ	17.4635	1	17.4635
第11cトレンチ	22.762	0	
第11dトレンチ	10.6558	0	
第12トレンチ	36.1813	1	
第13トレンチ	26.3226	2	3.1446
第14aトレンチ	34.5676	2	9.6783
第14bトレンチ	45.2234	0	
第15トレンチ	64.8294	1	10.7379
合 計	483.253	20	53.3372

調査データにより工場建設時、および解体時に実施されたと推定される大規模な視乱は、当初の予想を下回り、広範な分布は示さず、影響度は比較的小さい点を指摘することができた。つまり、旧工場建物の中で、鉄筋高層建物以外の低平な建物基礎については、基礎深度が浅く、遺跡への影響度はかなり限定されるものとなっている。

小 結 ー今後の調査への課題ー

蔭山万寿寺は、徳治元年（1306）に大友氏五代貞親が建立したと伝えられ、東九州における臨済宗の中心寺院となった。博多承天寺に住していた直翁智侃を開山とする。

寛文四年（1664）に記載された「蔭山古伽藍編額記并序」や「蔭山略記」には四町×六町、あるいは八町四方の寺域を有し、直翁禪師の常楽院をはじめ、十門の諸院が本殿に続くという壮大な伽藍の様子が伝えられている。調査では、これらの記録に呼応するように14世紀段階から16世紀に比定される遺構・遺物が検出された。また、当対象地域南側にある帆秋病院の建物に挟まれた空間には、万寿寺跡に伴う基壇と推定される土壇が残されている。上部には「上乗妙典一石一字之塔」と記された石碑が建立され、江戸時代初期（寶永三年）に一字一石経塚として利用されたと推定される。昭和9年に刊行された「豊後萬壽寺の史蹟」には堀地内に残る土壇の写真が掲載されている（久多羅木1934）。また、現地には現在も土製埴や瓦が散布する状況が認められる。このように、文献史料上のみならず現地においてもその面影を現在に伝える万寿寺跡であるが、本項では、今回の確認調査を踏まえ、今後に残された調査上の課題について提示を行い、まとめとしたい。

調査対象地域中央に推定される方形区画について

基本層序の項で触れた各時代の整地層の存在は、そのまま、約300年におよぶ蔭山万寿寺の歴史を示しているといえる。各地点において整地層が欠落する部分があるのは、当地に工場が建設される前に存在した水田耕作に際しての削平によるものであり、水掛かりの関係であろう、旧地割りに相応する形で遺存状況に差異が認められる。

こうした状況の中で最も遺存状況の良好な地点が中央部（第2トレンチ）付近であり、水田耕作土下に16世紀後半以降の整地層（SX060）が広範に分布する。16世紀段階の遺構は、このSX060に被覆されている訳だが、この直下においてSD053などの溝状遺構の存在を確認することができ、SD053の延長部が第1トレンチで認められない点や溝で囲繞された内部空間の整地土の状況が周囲のものと異なる点などから、調査対象地の中央に約30m四方の方形空間の存在を想定した。この空間の構築年代は、整地層中の京都系土師器皿の年代観から、16世紀中頃～後半と推定される。また、方形区画は溝埋没後も「土坑連続型区画」により踏襲され、整地層（SX060）に被覆されるまで存在したものと考えられる。

整地層（SX060）の施工時期と火災記録について

では、整地層（SX060）の年代は現状でどこまで限定できるのだろうか。本文中でも触れたようにSX052を被覆しているので、SX052出土の京都系土師器皿の年代観から16世紀後半以降であることは確実である。

他に年代を示唆する遺物には、志野焼の微細片がある。出土層位はSX060中ということになるが、SX060の上部は、耕作痕と考えられる掘削が随所で認められ、堀地利用の時期を想定できる。当該資料はこの掘削層とプライマリーな土層との微妙な位置において出土しており、俄かに遺物の層位は決しがたい。仮にこの資料がSX060だとすれば、当該整地の時期は慶長期以降の所産となる。この点については今後の調査における課題のひとつとしておきたい。ちなみに、万寿寺には文献上、いくつかの火災記録がある。16世紀の後半代のものでは、元亀元年（1570）、島津の府内侵攻に伴うと考えられる天正15年（1587）の火災記録が特に著名であるが、今次の調査では、大規模火災に伴うような焼土層の存在は確認されていない。SX052の遺存状況からSX060の施工にあたっては、上面の削平行為が伴っていたと考えられ、焼土層が確認されないのは、この時の削平による可能性も考慮しておく必要がある。つまり、SX060の施工が天正15年（1587）以降に実施されたことで大規模焼土層が欠失したとする可能性も今後検討の余地がある。このことは、SX060上面において顕著な遺構の確認がなされ

ていないという点とも照応する事象として今後の調査にあたっては留意していかなければならないだろう。

14～15世紀段階の状況に関しては、16世紀段階の遺構の保全も併せて考慮する必要があったため、第2トレンチでは部分的な掘り下げしか実施しておらず、遺構の全体様相は不明である。ただ、SX070は限られた範囲での所見のため確実性に欠けるが、出土遺物が14～15世紀段階のものにより構成されており、当該期の遺構である可能性も現状では考えられる。

また、上部整地層が希薄であった第1トレンチでは、東西溝(SD025)を確認し、14世紀段階の遺構の存在を明示することができた。この点は上部整地層下に良好な状態で当該期の遺構が遺存している可能性を示唆するものとして重要である。

市町筋（一之大路）の成立時期と万寿寺について

「府内古図」に描かれた戦国時代の豊後府内には3本ないし4本の南北道路と5本の東西道路による街区割りが存在する。なかでも南北道路に関しては、大分川寄りに存在する市町筋と呼ばれる道路の成立が最も早く、西側の3本の道路は、大友氏館の整備に伴って敷設されたとする考え方が一般的である。

市町筋の成立については、この大分川寄りの南北道路筋に、大友家初代能直が下総国古河から動静した忠実須を祀ったという伝説のある工座町が存在し、これが平安末期以来の河原市想定地区と一致する点などにより、大分川沿いの市町筋から発展したとする可能性も示唆されてきた。その年代に関しては、天喜元年(1053)の宇佐宮御神大鏡領申文中に「市河」の表記がすでに認められることから、その成立を大友氏入府以前に求める指摘もある。これらの状況から市町筋の成立を14世紀初頭の万寿寺創建以前と考え、万寿寺がこの市町筋の掌握の一環としてルート上に寺域を占有するといった想定も考慮されてきた。ところが、現状での考古学的な調査所見による市町筋の初現は中世大友府内町跡第7次・16次・17次調査地点の調査成果に依拠すると、15世紀前半代を遡らない。この点について、第7次・17次調査地点での所見を検討すると、15世紀前半代において溝に挟まれた空間の存在を認知でき、これを道路として認定することが可能であれば、この段階を初現とする。しかしながら、これ以後、戦国末期まで踏襲される南北道路が若干の掘り込み地帯を伴って構築されている点に留意すると、15世紀前半段階以前の路面が後出する道路によって破壊、滅失してしまっている可能性も否めなかった。ところが、近年、このような状況を考察するに際して極めて参考になる事例が提示されている。中世大友府内町跡第20次調査区―推定万寿寺跡の寺域内北西エリアに相当する調査区であり、平成14年度に大分県教育委員会によって調査が実施された。調査後に公開された現地説明会資料によると、大きく次のような3時期の遺構変遷が認められている。

第1期 14世紀代 創建段階に近い遺構群と推定されており、二条の並行する溝状遺構が検出されている。溝は調査区中位で東側方向へほぼ直角に屈曲しており、創建段階の寺域北西角を区画する施設の一部である可能性が示唆されている。遺構方位がほぼ真北を示している点を大きな特徴とする。

第2期 調査区北側において1間7尺を基準とする庇付の掘立柱建物跡が確認されている。柱穴内には河原石を礎パンとして配置する。建物方位は真北から東へ9°振っている。出土遺物から15世紀前半の帰属年代が推定されている。

第3期 16世紀段階の遺構群により構成される。寺域内部の区画施設と推定される南北溝と寺域北限を区切る堀様の溝状遺構などがある。遺構方位は真北から4°東に振る。

といった変遷過程を確認することができるという。

およそ300年間の変遷を辿ることができる訳であるが、都市計画方位軸に関しては、坂本嘉弘氏によって注目すべき指摘がなされている。市町筋とされる南北道路は真北から9°振り、大友氏館周辺の南北道路は4°振るという計画軸により施工されており、既往の調査データによれば、前述の第20次調査区の年代観とほぼ符号するような状況で各時期の遺構が検出されているという。第20次調査の遺構方位の変遷は、万寿寺創建当時の設計

軸線が真北を基準にしたものであった可能性を示し、15世紀前半代への時間変遷に伴って9°の振れをもつ計画線へ変更された可能性を示唆していると言える。

つまり、真北から東へ9°振るという市町筋の方位に近似する方位基準の採用が、万寿寺の推定境内域では15世紀前半に実施されているという状況を示している。先述の道路遺構の現状で確認できる初現年代が15世紀前半代であり、万寿寺の基準方位変更と時期的にも一致する事実は、極めて示唆的であり、換言すれば、市町筋が万寿寺創建後、約100年を経過した後、万寿寺の基本軸の変更に伴い成立した可能性が高いといえよう。

以上の点を実証するには、推定万寿寺境内域中における、寺域の南北に存在する市町筋を繋ぐ延長線上の道路遺構の有無を確認することが必要不可欠であるが、今次の確認調査では、現況の土地利用事情から道路延長線に相当する部分への積極的な確認トレンチの設定は行えなかった。今後の同調査地点の調査にあたっては、第一義的に留意していく必要があろう。ただ第18図に示したトレンチ配置図で明らかに、市町筋の南北道路の延長線上に第1トレンチ及び第3トレンチの一部が相当している状況が想定されるが、両トレンチともに道路跡に関する遺構の検出はなされておらず、万寿寺創建が市町筋と呼称される南北道路の成立に先行する可能性に現段階では有利な状況を示していると言える。

上述のような状況を踏まえて今後は計画的な面的な調査が必要であり、後世の記録に示される万寿寺の伽藍配置の解明が次段階の大きな課題といえよう。

参考文献

万寿寺蔵「蘇山門中歴代通記」

万寿寺蔵「釋余集」

久多羅木儀一郎 1934「豊後萬壽寺の史蹟」『大分縣史蹟名勝天然記念物調査報告書 第12輯』

大分市教育委員会 2000「大友館跡—発掘調査概報Ⅰ—」

大分市教育委員会 2001「大友館跡—発掘調査概報Ⅱ—」

大分市教育委員会 2002「大分市市内遺跡確認調査概報 —2001年度—」

大分市教育委員会・中世都市研究会 2001「南蛮都市・豊後府内 都市と交易」

大分市・大分市史編纂委員会 1987「大分市史 中巻」

大分市・大分市史編纂委員会 1987「戦国時代の府内復興想定図」『大分市史 中巻付図Ⅱ』

大分県教育委員会 2003.3 「中世府内町跡」 現地説明会資料

木村幾多郎 2001「豊後府内城下町移転と旧府内町」『大分・大友土器研究会論集 大分・大友土器研究会』

鹿毛敏夫 2001「文献・絵図からみた大友館と府内の町—都市と国際性—」『南蛮都市・豊後府内 都市と交易』

大分市教育委員会・中世都市研究会

坂本嘉弘 2001「考古学から見た中世大友府内城下町の成立と構造」『南蛮都市・豊後府内 都市と交易』

大分市教育委員会・中世都市研究会

3. 中世大友府内町跡第24次調査（推定万寿寺塔跡地区）

調査体制

調査主体 大分市教育委員会 調査指導 大分県教育委員会

調査担当 中西武尚・岩尾美保子

発掘調査従事者

安東隆司・伊藤輝喜・今永達彦・大久保寛至・後藤康子・清水やす子・西田勝子・三重野 孜・草野扶美子

調査区・層位

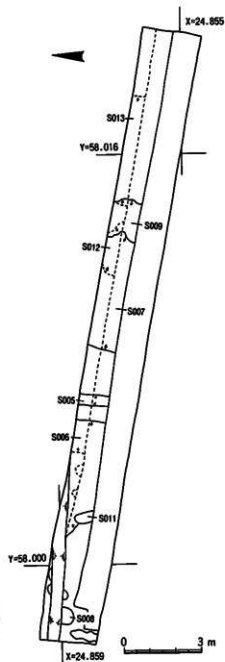
調査地は、徳治元年（1306）に建立された推定万寿寺跡の南、寺小路町（推定塔跡地区）に比定されている場所である。また、中世府内町跡第6次調査において、万寿寺の創建段階と考えられる東西の区画溝が確認された地点から北に約10mほどのところに位置する。府内古国には、大きく方形区画された寺域の南側に南北に長い区画がみられ、そこに五重塔が描かれている。今回、その塔跡推定範囲の北西部に幅約2.4m・長さ約24mの東西方向のトレンチを設定し調査を開始した。調査は廃土の制約から途中、北側の幅約1.2mを掘り下げ検出を行い、さらに北側約0.6mの範囲で検出された遺構の掘り下げを行った。

現地表から約30～40cm堆積している耕作土（暗褐色土・茶褐色土）を取り除くと標高6m前後のところで安定面が確認される（第38図10層）。この暗茶色土層からは近世陶磁器が出土している。この層をさらに掘り下げると、調査区西側では地山と考えられる淡茶緑色砂質土層が確認される。そこにはS008やS006などが切り込んで遺構を形成している。東側では地山と考えられる層が異なり、茶赤色砂質土の固くしまった安定地盤となる。この基盤面には、S012・S013→S009→S007の順に各遺構が構築される。地山は標高約5.4mで赤茶色砂利層へと移行する。

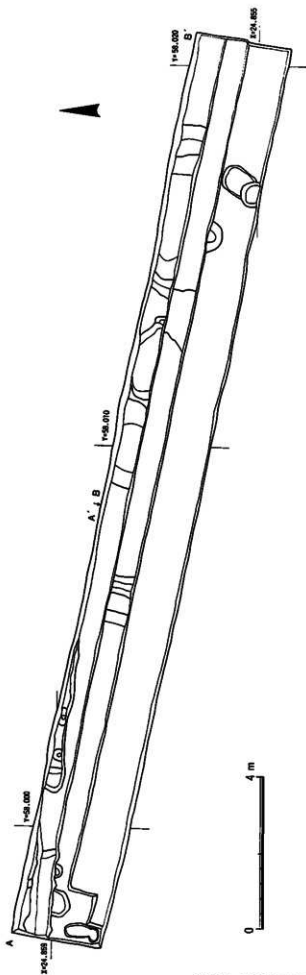
検出遺構

今回の調査で確認された遺構の性格については、トレンチ調査の性格上判然としなが、現時点での所見について記す。

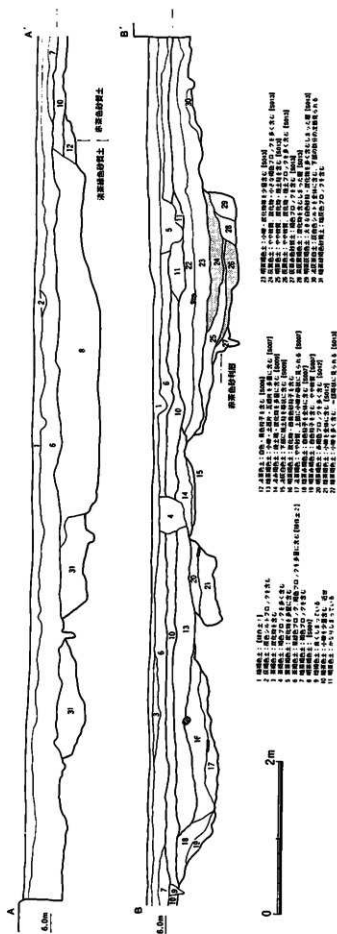
S007は現状で幅約4mを測る断面が浅い皿形の形状を呈す。堀土には小礫や瓦の碎片などを多量に含み、よくしまっている。一見、小礫が帯状に堆積しているようにも見える（第38図13層）。この下層には、幅約3m、深さ約0.3mに掘り込まれた遺構が確認できる。先の層と同じ位置での掘り返し認められ、堀土の状況も似ていることからS007とは同一遺構と考えておく。このS007の下部からは、もう1つS012とした土坑状の遺構を確



第37図 遺構配置図 (1/120)



第38図 遺構全体図 (1/100)・土層観察図 (1/50)



認している。西側に挟み込んだ袋状を呈し、長さ約1.0m、深さ約0.3mを測る。

S007に切られるS009は断面が浅い皿形の形状を呈し、長さ約1.4m、深さ約0.2mを測る。埋土には多量の焼土塊や炭化物を含み、下部には焼土粒が帯状にみられる。廃棄土坑と考えられるが、铸造関連の遺構の可能性も考えられる。S009に切られるS013は、はじめ幅約2mほどの断面逆台形の形状を呈していたが、その後、数回の掘り返しの後、浅い掘り込み状の形状で調査区外の東側に延びている。現状での検出長は約7mを測り、深さは約0.7mを測る。最終段階での埋土は小礫を多量に含み、よくしまっている。逆台形の形状の段階では、2回の掘り返しの後、間に間層を挟んだ2層の炭化物層が確認できる。S006は地山の変化する辺りから西側に掘り込まれた浅い遺構で、量は多くないが、瓦片の出土が目立つ。S008は土坑状の遺構で、埋土は地山土に近似しているが、橙色粒子や摩滅した土師器片を多く含んでいる。

出土遺物

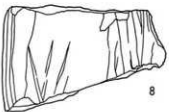
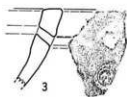
第39図1～8はS007出土の遺物である。1～5は瓦質の鉢で口縁部付近に巴形文などのスタンプ文がみられる。3には内面から外面への斜め方向に穿孔があり、把手の取り付け部と考えられる。4・5は底部片で脚が貼付けられている。5は三足の香炉になると考えられる。7は軒平瓦である。瓦当面上端は、ヘラ状工具による面取りがなされている。8は鬼瓦片と考えられる。以上の資料から時期比定を行うのは難しいが、小破片ではあるが塚手の京都系土師器が出土しており、また、これより新しいと考えられる遺物が出土していないことからS007の所産時期を16世紀後葉～末葉と考えることができる。その他、遺構の時期とは関係ないが、6の灰釉陶器皿の出土もみられる。9～12はS008出土の遺物である。多くの土師器片が出土したが、摩滅が著しく調整等是不明なものがほとんどである。9～11は土師器小皿で、口径と底径の差が少なく、直線的に短く立ち上がる。法量は口径約8～9cm、器高は約1.2cmを測る。13～15はS009出土の遺物である。13は瓦質土器で、凸縁で区画された中にスタンプ文が配され、その上位にも形押しによる連弁状の模様が見られる。器種は不明であるがなんらかの特殊品と考えられる。14は軒丸瓦である。周囲の珠文の一部が残存しているのみである。15は青磁小碗である。口縁部で屈曲し、外面には片彫りによる連弁文が確認できる。16はS011出土の緑釉陶器皿である。軸の残りはよくないが、内面にはミガキの痕跡が認められる。素地は硬質で、高台は丁寧な削り出しによる輪高台である。18はS013出土の鬼瓦片である。表面の端と側面には研磨面が認められ、砥石などとして2次利用されていた可能性が考えられる。各遺構からは直接時期比定につながるような遺物の出土はみられず、瓦質土器の出土が目立っている。また、鉄滓の出土も認められた。

小 結

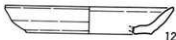
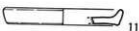
今回の調査では、南北方向の溝状遺構になると考えられる2条の遺構とそれに切られる2基の土坑を確認した。溝状遺構はS007～S009→S013と間に土坑状のS009を挟んで切り合っており、時期差が認められるが、埋土の状況はよく似ており、上部に小礫を多く含む茶褐色土層が堆積している。出土遺物にも時期差は認め難く、一連の遺構の可能性も考えられる。推定塔跡地区の中心近くに位置するが、遺構の位置付けについては、今後の調査を待たたい。

また今回、直接塔跡に関連するような遺構は検出されず、遺物の中にも瓦類が多量に出土するといった状況はみられなかった。調査区を設定した地点が、推定塔跡地区の中でも北西側に位置していたことに起因しているよう。推定されている塔跡については、調査の状況からさらに南側に位置している可能性が高いと考えられる。

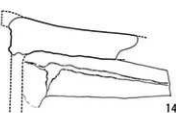
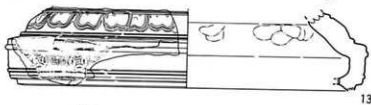
S007



S008



S009



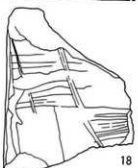
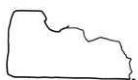
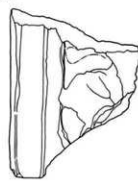
S012



S011



S013



0 10cm

第39図 出土遺物実測図 (1/3)



中世大友府内町跡 第24次調査区全景（西から）



中世大友府内町跡 第24次調査区全景（東から）

第3章 中世大友城下町跡出土土師器の編年

—14・15世紀の土師器の坏について—

はじめに

中世大友城下町跡の調査は、大分県教育委員会と大分市教育委員会の二つの組織が役割分担し、同時進行で実施している。さらに、調査員も複数名がかかわり、それぞれ、調査地区を異にしている。そこで、各調査員の時間軸を共有するため、最も多く出土する土師器編年の共通理解に努めている。以下に報告する土師器の編年案はその一環として各調査担当者と供に検討したもので、この案を各調査地区で、叩き台とし、検討しながら使用して、さらに精度を高め、最終的には中世大友城下町跡での中世土師器編年の確立を目指している。

基本資料の出土状況

第40図に図示した編年案の基礎とした資料は、中世大友府内町跡第20次B調査区出土のものである。その出土状況は、S003の溝を、S048の土坑が切っている。S048出土土師器には、上部の一群と約70cm下（床面）の一群がある。このことから、S003→S048下層→S048上層の順で新しくなる。これに、形態的に類似する資料、型式学的な視点、伴出する土師器などをもとに資料を補強した。

土師器の編年

14世紀中頃（1～11）

中世大友府内町跡第20次A調査区の溝遺構であるS1505からの出土である。坏の特徴は、器高が高く、口縁部が外反する。小型の土師皿は、底部が厚く、口縁部の立ち上がりが高く、底径と口径の差が少ない。こうした特徴は、これまで豊後地域の先行する研究で、14世紀代と考えられている。^{※1}ここでは、次に編年される資料を全頭に置き、14世紀中頃と想定する。

14世紀後半（12～25）

中世大友府内町跡第20次B調査区の溝遺構であるS003（12～18）と、それに平行するS004の溝出土の資料（19～25）^{※4}をこの時期とした。その根拠は17の常滑焼大甕の口縁部形態、^{※2}18の口壳の白磁、^{※3}24の変形した雷文の青磁碗、25の高台が退化した吉備系土師器の伴出がある。^{※5}これらの陶器・磁器・土器のそれぞれの編年は、14世紀または14世紀後半に置かれている。

土師器の坏の特徴は、前段階より器高が低くなり、口縁端部が内湾気味になるものがある。土師器の小皿は底部の器壁が薄くなる。

15世紀前半（26～42）

中世大友府内町跡第20次B調査区の溝遺構であるS003を切るS048の土坑からの出土資料を、この時期とした。さらに、この遺構からは上部層と下部層でまとまった資料が出土している。下部層出土の土師器（26～30）は、底部からの立ち上がり部がふくらみ、口縁端部は内湾気味になる。上部層出土の土師器（31～42）は、下部層出土の土師器と同形態のものも含まれるものの、31～34のように、底部から口縁部が直線的に立ち上がり、中位で器壁が最大の厚さになり、口縁端部は尖る形態のものが伴う。

S048に見られる上部と下部の形態の相異の傾向は、非^{※6}であるS009の上面に掘り込まれた土坑であるS098でも認められる。

15世紀後半（43～69）

大友氏館跡第1次調査S008^{※6}（43～55）と中世大友府内町跡第5次B調査の溝遺構であるS251（56～69）を

この時期と考える。

この15世紀後半の土器には大きく3系統の土器が含まれる。大友氏館跡第1次調査S008(43~55)の資料に対し、報告者は、43~51をⅠ類、52・53をⅡ類、54・55をⅢ類と分類している。これらは、形態や製作技法が異なるばかりではなく、色調もⅠ類が橙褐色、Ⅲ類が白色で、Ⅱ類はその中間色と述べている。

その系統は、Ⅰ類が前段階からの系譜を引く在地系の土師器の坏であるが、Ⅲ類は、周防の大内氏館跡出土のものに酷似する。^{註7}そして、口縁部が直線的に外傾するⅡ類は、両者の折衷形態とも言える。

この時期より新しいと考えるのが、溝であるS251の下層出土の資料(56~69)である。この遺構からは、前段階の大友氏館跡第1次調査S008でのⅠ類が見られず、Ⅱ類(56~58)と在地化したⅢ類(59~66)が見られる。Ⅱ類は前段階からの系譜を引くもので、類似した形態である。Ⅲ類は前段階で見られた大内氏館跡出土のものに酷似した白色の坏が、豊後国で変容・在地化し、大友氏館跡第1次調査S008出土のⅢ類とは異なる。

その形態は、小さい糸切りの底部から口縁部が逆「ハ」の字状に開き、端部はやや内湾気味になる。内面にはラセン状の沈線が巡る。底部は中央部が極端に薄く、周辺部である底部端部は器壁が厚くなる。また、色調も大きく変化した、赤褐色を呈する。この土師器の坏は、京都系土師器が導入されるまで、形態変化をとげながら存続し、姿を消す。

この溝であるS251の下層から伴出する土師器の坏以外の陶磁器は、67・68の備前焼播鉢口縁部、69の剣先文と口縁部に二条の平行線文のある青磁碗の存在がある。これらの資料は、15世紀後半に編年されている。^{註8}

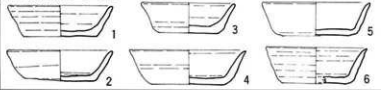
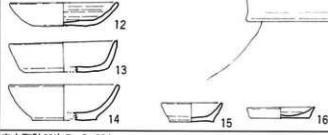
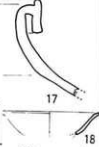
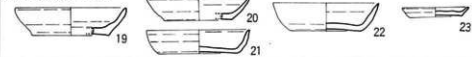
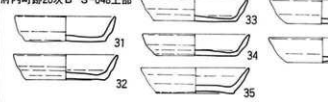
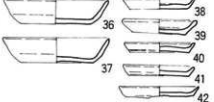
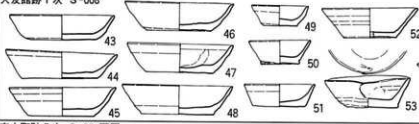
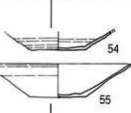
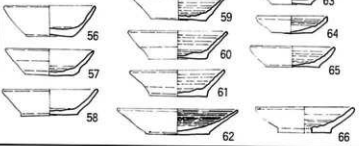
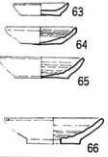
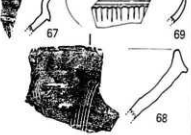
問題点と今後の課題

- ① 中世大友府内町跡第20次B調査区S003・S004出土の資料は、溝からの出土で、年代決定は、数型式ある常滑焼の大甕の最新式・貿易陶磁器で想定している。一括埋納資料とは異なり、特に土師器の坏は、一括性が乏しく、今後さらに良好な資料が求められる。
- ② 15世紀前半の土師器の年代決定については、今後、貿易陶磁器や備前焼・常滑焼など年代観の比較的是っきりした資料との共伴関係をとらえる必要がある。

註

- 1 坪根伸也・塩地潤一「豊後国の土器編年」『大分・大友土器研究会編集』大分・大友土器研究会 2001年
- 2 中野春久「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』小学館 1995年
- 3 小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究 No. 2』日本貿易陶磁研究会 1982年
- 4 上田秀夫「14~16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究 No. 2』日本貿易陶磁研究会 1982年
- 5 山本祝世「備前南部地域における古代末~中世の土師器の展開」『中近世土器の基礎研究 Ⅲ』日本中世土器研究会 1992年
- 6 高島 豊「大友館跡第1次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報 vol.10 1998年度 1999年
- 7 古賀信幸「大内氏遺跡出土土師器の編年」『大内氏館跡Ⅲ 大内氏関連遺跡並遺跡Ⅰ』山口市教育委員会 1991年
- 8 桑岡 実「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会 2000年

(文責 大分県教育庁文化課 坂本嘉弘)

		年代參考資料
14 世紀 中頃	府内町跡20次A S-1505 	
	府内町跡20次B S-003 	
14 世紀 後半	府内町跡20次B S-004 	
	府内町跡20次B S-048下部 	
15 世紀 前半	府内町跡20次B S-048上部 	
	大友館跡1次 S-008 	
15 世紀 後半	府内町跡5次 S-251下層 	
		

第40図 中世大友城下町跡出土土師器編年表(2003. 3試案 縮尺1/4)

国指定史跡 豊後国分寺跡

—2002年度確認調査概要報告書—



2003

大分市教育委員会

例 言

1. 本書は平成14年度に大分市教育委員会が実施した国史跡豊後国分寺跡における埋蔵文化財確認調査の概要報告書である。
2. 発掘調査の費用は、国と県から補助金を受けて、大分市が負担した。
3. 調査における遺構実測・写真撮影は中西武尚・岩尾美保子（大分市教育委員会文化財課嘱託）が行った。
4. 出土遺物の整理・実測・浄書は岩尾・奥村義貴（大分市教育委員会文化財課嘱託）、内田順子（大分市教育委員会文化財課臨時職員）、中西が主としてこれにあたり、小野千恵美・伊東祥子・首藤直美・飛高祐子・木村藍子・近藤慎也（大分市教育委員会文化財課臨時職員）・水町裕子（大分市教育委員会文化財課嘱託）の協力を得た。
5. 遺構実測図および遺構配置図は、世界測地系を基準とし、第2図豊後国分寺跡伽藍配置と調査位置図については、豊後国分寺跡基準座標（N-3° 50' 38" -E）と国土調査法第Ⅱ座標系を併用している。したがって図中に用いた方位はすべて座標北（G.N.）をさしている。
6. 座標の測量については、（有）九州文化財リサーチに委託した。
7. 本書で使用した遺構表記は以下の通りである。
SD 溝状遺構 SK 土坑 SX 大形堅穴遺構・性格不明遺構 SP 柱穴・ピット
8. 本書の編集・執筆は中西が担当した。

◆目次

第1章 はじめに	1
1 調査に至る経過	1
2 調査組織	1
3 豊後国分寺跡の概要	2
第2章 調査の概要	4
1 調査地・層位	4
2 検出遺構	7
3 出土遺物	9
第3章 まとめ	20

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

国史跡として昭和8年2月28日に指定された豊後国分寺跡は、その後、国・県の補助を受け、史跡の環境整備を目的とし、昭和49年～53年に、寺域及び伽藍配置把握のための発掘調査が行われ、昭和61年にその補足調査が行われた。昭和55年～61年には土地の買い上げを行い、昭和61年～平成3年度には、整備工事が行われた。加えて、昭和59・60年度には大分市歴史資料館建設用地他の発掘調査が実施され、豊後国分寺跡は、正確な寺域の把握及び伽藍配置を明らかにすると同時に、史跡およびその周辺の環境整備が進められてきた。

一方、推定金堂を中心とした南北270m、東西220mという広大な史跡指定の範囲ゆえに、公有化できなかった周辺部の住宅地において、住居の老朽化が進み、建て替え・建て増し等の個人住宅の再開発が始まっている。平成10年度にはこうした建て替えの際の確認調査により、推定回廊内において梵鐘鋳造遺構が発見されるなど貴重な調査所見も得られている。

今回も前回同様指定地内における個人住宅の建て替えが計画され、住宅の基礎部分や浄化槽の設置による遺構破壊を未然に防ぎ、遺構保存をはかるため、国・県の補助を受け、確認調査を実施した。

2. 調査組織

調査主体 大分市教育委員会

教 育 長 秦 政博

事 務 局	帯刀 修一	(文化財課 課 長)
	木村幾多郎	(文化財課参事兼大分市歴史資料館館長)
	王永 光洋	(同 上 参 事)
	熊谷 一秋	(同 上 課長補佐兼管理係長)
	讃岐 和夫	(同 上 課長補佐兼文化財係長)
	後藤 典幸	(同 上 指導主事)
	姫野 公徳	(同 上 指導主事)
	幸 裕美	(同 上 主 任)
	桑原 治	(同 上 主 任)
	三浦 重紀	(同 上 主 事)

調査担当	塔鼻 光司	(同 上 専 門 員)
	中西 武尚	(同 上 技 師)
	岩尾美保子	(同 上 嘱 託)

発掘作業員

安東隆司 大久保寛至 後藤康子 福田司 福田秀子 福田求 福田宣子

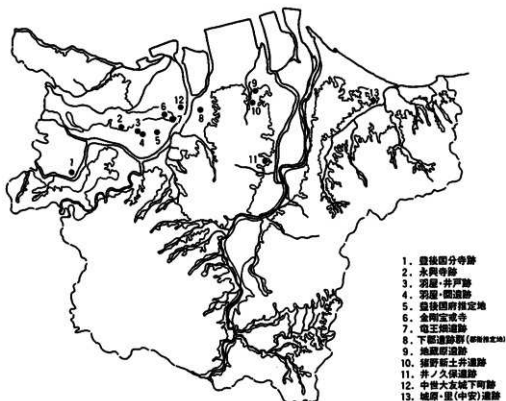
3. 豊後国分寺跡の概要

豊後国分寺は、天平13年(741)、聖武天皇の「国分寺建立の詔」を受け諸国に造立が進められた国分寺の一つで、奈良の東大寺を総国分寺とする。市内の西南部、大分市大字国分に所在し、現在なお天台宗医王山国分寺と称し、薬師堂・観音堂を中心とした境内をようしている。大分川の営みによって形成された標高約30mの台地上に立地し、豊後国府推定地からは直線距離にして約7km離れている。

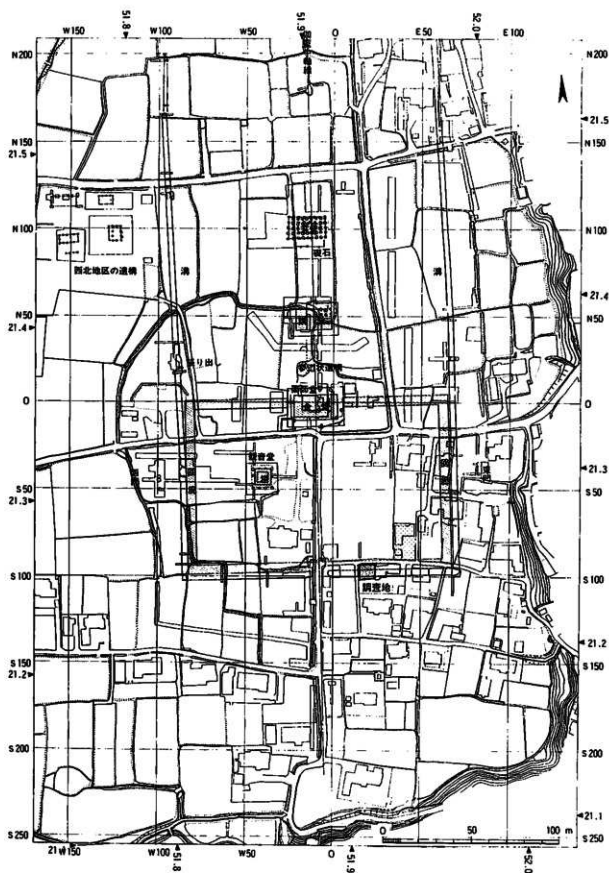
豊後国分寺跡の寺域は、東西約182m、南北約300mの広大な範囲である。伽藍配置は、南から南門・中門・金堂・講堂・食堂と一直線上に並び、中門から出た回廊は金堂に取り付く。回廊内には、西よりに七重塔が配置され、東よりでは小規模な基壇状遺構の基底部のみが確認されている。中門から回廊に平行して延びる溝は、金堂付近では曲がらずに、そのまま北に直進し、寺域内を区画する溝となっている。また、食堂路の東側約100mの寺域外(北西地区)からは、4棟の掘立柱建物跡が確認され、寺院に附属する施設(雑舎)と考えられる。さらに最近の調査において、七重塔跡の南東80m、中門と金堂をつなぐ回廊の内側で、梵鐘鑄造遺構が発見されている。9世紀の初めごろに造られたもので、この時期では全国の国分寺の中でも初めての発見になり、遺構の残りもよくその制作工程なども復元が可能である。

豊後国分寺跡のこのような伽藍配置は、塔の位置が東西逆になっているが上総国分寺に近い配置である。また、回廊内に塔が配置される形式は九州の各国分寺でみられ、大宰府管内の特色といえる。

なお、尼寺の位置については、北西地区から「尼寺」と書かれた墨書土器が出土しており、また、国分寺跡の西側の耕作地から埴り出しをもつ礎石が発見されるなど、国分寺に隣接してあった可能性が高い。



第1図 古代の主要遺跡分布図



第2図 豊後国分寺跡伽藍配置図及び調査地位置図

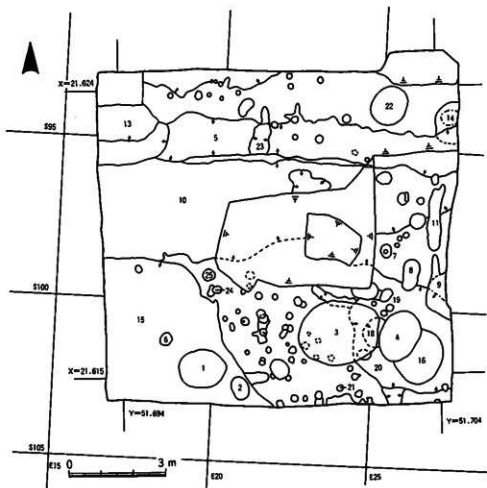
第2章 調査概要

1. 調査区・層位

調査区は推定中門跡の東側、豊後国分寺跡の伽藍中軸線を基準とした座標 (N-3° 50' 38" -E) では、S100-E25を中心とした範囲に位置し、調査面積は約120m²を測る。推定中門跡から東に延びる回廊とその南側に掘られた溝跡が調査区内の全体にかかる。中門跡の東側と西側ではすでに約1mの高低さがみられ、回廊跡については、すでに削平されている可能性が非常に高く、平成元年度の中門地区の調査でも確認されていない。また、他の遺構についても、すでに宅地化されていたところであり、遺構の遺存状況の悪さが懸念された。

現地表の標高は約29.6-29.7mを測り、そこから約0.5mの厚みで宅地造成土（茶灰色土）がみられる。調査区の南東側には、砂と土を硬くつき固めた版築層が何層も確認でき、地権者の話によると土間のあった所にあたる。この宅地造成土を掘り下げると、安定地盤である黄褐色土層にいきつき、遺構検出面となる。検出面の標高は約29.2mを測るが、調査区の中央部分は、もともと半地下式の竈小屋があったらしく、大きく削平を受けている。

検出された遺構は、調査区の中央を東西に延びる溝跡 (SD010)、その北側を同じく東西に延びる溝状遺構 (SD005)、SD010の南側で大きく掘り込まれた大形竈穴遺構 (SX015・SX020) である。この他、南側に土坑群 (SK001・SK004) やピット群が集中して検出されている。



第3図 遺構配置図 (1/120)

2. 検出遺構

溝

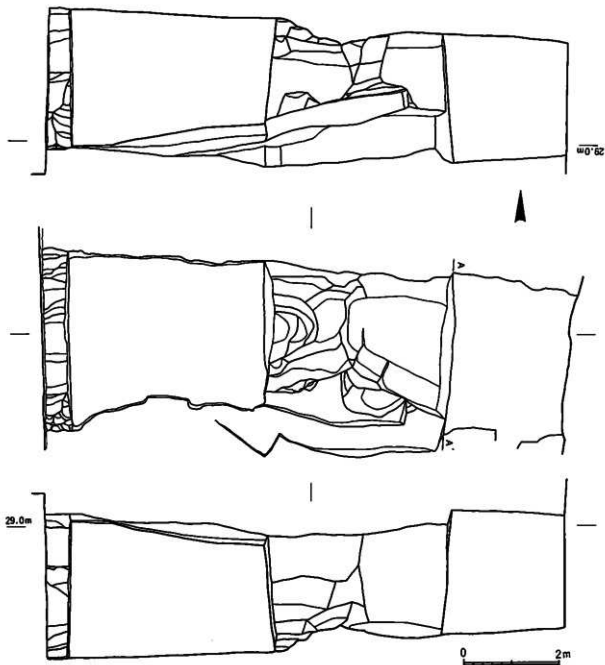
SD010 調査地の中央を東西に貫通する溝で、中門地区やその他で確認されている推定回廊跡の南側に並行する溝の続きである。先の竈小屋により削平を受けていた中央部分を利用して、溝の深さや形状を知る目的で掘り下げを行った（第5・6図）。検出長約11m、幅約3.8～4.0m、深さ約2.6～3.0mを測る。中央で掘り下げを行った地点の東壁と調査区西壁において土層観察を行った。それぞれ断面形状が異なり、中央部では逆台形を呈すが、西壁においてはU字に近いV字状を呈している。西壁よりも12m西側で調査された中門地区では、断面逆台形を呈しており、極めて近い範囲でも断面形状の異なることがわかる。中央部の状況を見ると、長土坑状に掘られており、長土坑の端と真中の辺りでは形状が異なってくるものと考えられる。土層観察から現状で数回の掘り返しが確認でき、新しくなると深さも浅くなり、規模も縮小されてくるようである。中央部は長土坑どうしが接するところであるが、北壁は丁寧に掘り込まれ直線的である。逆に南壁は掘削のプランが残り、いびつな形状を呈す。土層観察からも北側では、丁寧な掘り返しが行なわれている。南側には一見地山と間違える巨大なブロック土が堆積している。黄褐色土地山の崩壊土と考えられるが、溝の掘り返しの際もそのままにされている。出土遺物は全体的に少なく、瓦の出土量も少ない。遺構の時期については、埋没途中の土層から9世紀代の土師器が出土しており、この時期までにはすでに造られていたと考えられる。

SD005 SD010の北側を並行して延びる東西溝状遺構である。検出長約11m、幅約1.0～1.5m、深さ0.1～0.5mを測る。西側での基底部の標高は、約29mを測り、東側では約28.6mを測り、東側に緩やかに低くなっている。埋土は黄褐色ブロックを多量に含んだ黒黄褐色土を基本とし、東側の残りの良いところで縦断面の土層観察を行った結果、積土状に斜め堆積しているのを確認した。さらに調査区東壁の土層観察及び平面精査において、その上部に幅約2.2m、厚さ約0.1mの硬化面（暗黒黄褐色土）を確認した。基底部は凹凸が激しく、積土の際の突き痕、あるいは掘削の際の工具痕と考えられる。中門地区での調査においても同様の溝状遺構が確認されている。上部がかなり削平を受けていることから、遺構の性格を判断するのは難しいが、積土状の堆積であること、その上部に硬化面があることなどから、立体的な区画施設が想定される。東側の調査区際では土坑状の遺構SX014とSD005が並んでいる。両者には一連の埋土が堆積しており、同一遺構になると考えられる。SX014では柱痕らしきものが確認でき、そこには礎が数個集まっていた。SD005とSX014をあわせて、なんらかの柱の建つ施設が想像される。遺構の時期については、出土遺物から18世紀前半に比定される。

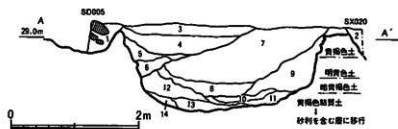
大形竪穴遺構

SX015 調査区の南西部でSD010を切って検出される。全体の規模は不明であるが、東西検出長約5.5m、南北検出長約4.0m、深さ約1.6mを測る。検出面から約0.8mで大きく掘り返しが確認できる。これより下は深さ約0.6mを測り、西側では垂直に掘り込まれ、東側は袋状を呈している。下部からは柱穴が何ヶ所か検出される。この途中に黄褐色土が帯状に堆積している箇所が3ヶ所ほど確認され、下層で確認されたものには柱穴を検出できる。最終の掘り返しの後は自然堆積と考えられる。中門地区の調査においても同様の大形竪穴遺構が部分的に検出されており、当遺構の性格については、土取りの痕と考えられている。途中数ヶ所帯状に堆積した黄褐色土層は、土取りの際の足場と考えられ、下部で検出された柱穴も土取りの際に使用されたものと考えられる。出土遺物には瓦が目立つが概して少なく、遺構の時期については、破片資料からの推定であるが10世紀から11世紀代と考えられる。

SX020 調査区の南東部、SX015の反対側でSD010を切って検出される遺構である（第7図）。直径約3.7mの平面不整形円形を呈し、深さ約1.3mを測る丸みをもった逆台形状を呈す。数回の掘り返しが確認できるが、遺構の



第5図 SD010遺構実測図 (1/80)



- | | |
|---------------------------|----------------------------|
| 1 黄褐色土：黄褐色ブロック層状に含む | 8 黄褐色土：大きな黄褐色ブロックを全体に含む |
| 2 灰茶褐色土：黄色砂子・黄褐色ブロックを含む | 9 黄褐色土：黄褐色土・黄褐色土の混雑層、地山崩壊部 |
| 3 灰褐色土：黄色砂子を少量含む | 10 黄褐色土：黄褐色ブロック・黄褐色土の混雑層 |
| 4 黄褐色土：黄色砂子を全体に含む、砂片を含む | 11 黄褐色土：黄褐色土を少量含む |
| 5 黄褐色土：黄褐色ブロックを含む | 12 黄褐色土：黄色ブロックを混雑に含む |
| 6 黄褐色土：大きな黄褐色ブロックを含む | 13 黄褐色土：黄褐色土・黄褐色土の混雑層 |
| 7 黄褐色土：黄色砂子・黄褐色ブロックを全体に含む | 14 黄褐色土：黄褐色土を少量含む |

第6図 SD010土層観察図 (1/60)

性格については不明である。SX015と同様に土取り痕の可能性も考えられるが、形状が異なる。出土遺物は少なく、瓦片が数個体出土している。遺構の時期については、SX015と同様に10世紀から11世紀代が考えられる。

土 坑

SK001 調査区南西部で、SX015を切っている。検出長約1.5～1.6mを測る楕円形を呈し、深さ約0.3mを測る。埋土は灰茶褐色土の単層で、黄褐色ブロックを多く含む、軟質である。

SK004 調査区南東部で、SX020・SK016を切っている。検出長約1.6m、幅約1.0mを測る楕円形を呈し、深さ約0.5mを測る。埋土は灰茶褐色土の単層で、下部には礫が廃棄されていた。

SK016 SK004に切られる土坑で、検出長約1.6m、幅約1.4mを測る楕円形を呈し、深さ約0.2mを測る。埋土は黒灰褐色土の単層で、基底部はドーナツ状に盛りあがっている。

その他の遺構

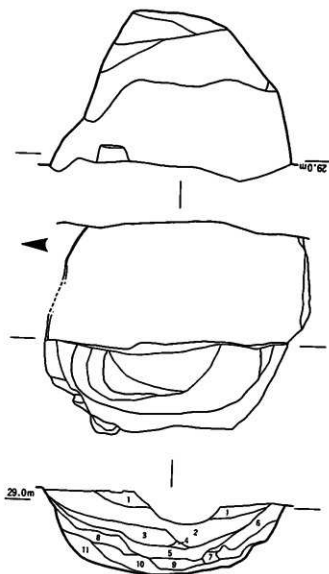
この他の遺構に調査区南側の中央部で検出されたピット群がある。埋土には①灰茶色土、②茶褐色土、③黒褐色土などがみられるが、①・②のピットからは近世以降の磁器片が出土している。これらのピット群や土坑の大半は、近世以降の所産時期が考えられる。

3. 出土遺物

第8図は今回の調査で出土した遺物の実測図である。

1はSK001出土の肥前染付蓋で、破損部に焼継がみられる。内底部に相当する部位には、朱で焼継文字が書かれている。焼継文字は「国分寺屋」と判読できる。端反碗に対応する蓋と思われる、製作年代は1820～1860年に比定される。

2・3はSK004出土のメンコ状製品である。陶磁器の底部を用いて、その周囲を丁寧に打ち欠いている。こ



- 1 茶褐色土：黄色砂子を含む、サラサラ
- 2 暗茶褐色土：黄色砂子・黄褐色ブロックを含む、サラサラ
- 3 黄褐色土：黄色砂子を均等に含む、灰褐色ブロックを含む、サラサラ
- 4 灰茶褐色土：黄色砂子・ブロック、灰褐色ブロックを含む
- 5 黄褐色土：黄色砂子・均等細粒ブロック・灰褐色ブロックの混在層
- 6 明茶褐色土：黄色砂子を均等に含む
- 7 黄褐色土：黄色砂子・ブロックを含む
- 8 黄褐色土：黄色砂子・ブロックを含む、8層に近接
- 9 黄褐色土：黄色砂子・灰褐色ブロック・黄色砂子を均等に含む
- 10 黄褐色土：黄色砂子・灰褐色ブロック・黄色砂子を均等に含む
- 11 灰茶褐色土：黄色砂子・灰褐色砂子を均等に含む

第7図 SX020遺構実測図 土層観察図 (1/60)

の他の出土遺物に型紙摺りの碗などがみられ、明治期以降の所産時期が考えられる。

4～7はSD005出土遺物である。4は肥前染付碗である。外面に網目文風の草文が描かれる。5は唐津系陶器刷毛目碗で、製作年代は17世紀後半から18世紀前半代。7は唐津系掻鉢の底部片。掻目は細かく、平底になる。

8～10はSD010出土遺物である。8は縄文土器の深鉢で、外面には沈線が施し、内面はミガキ調整をしている。縄文晩期の浦久保式に比定される。9は古式土師器甕である。胴部外面には刷毛目がみられ、頸部付近から口縁部にかけては、横ナデによりナデ消されている。外面には削り風のナデが確認でき、屈曲部には一部刷毛目が残る。10は土師器坏。やや丸みをもった胴部で口縁部が少し外反する。内外面は横ナデ調整である。色調は橙褐色を呈し、8世紀末から9世紀初めに比定されよう。

11～19はSX015出土遺物である。11は土師器坏の口縁部で、端部が小さく外反し、色調は橙褐色を呈す。12も土師器坏の口縁部で、直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめられている。色調は黄褐色を呈す。13・16・17は土師器坏底部である。いずれもへら切りで、13はその後調整がされている。色調は橙褐色を呈し、16は黄白色を呈す。14は橙褐色を呈す高台付坏で、長くハの字状に開いた高台が付けられる。底部から直線的に口縁部にのび、内面には回転ヘラミガキ調整が施される。15は黄褐色を呈す土師器坏で、口縁約10cmと小形である。口縁部中位で屈曲している。端部の1ヶ所にはススが認められ、灯明具としての使用が想定される。18は円盤貼付高台をもつ土師器坏で、色調は橙褐色を呈す。19は長脚の貼付けられる土師器で色調は黄白色を呈す。11～14・16・17は9世紀代に位置付けられるが、15・18・19では坏の小形化、円盤高台など新しい属性がみられ、10世紀から11世紀代に比定される。また、破片資料ではあるが、糸切りされた底部片が1点出土している。

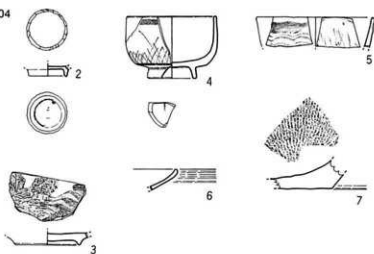
20～23はSX020出土遺物である。20は復元口径20.7cmを測る大形の土師器坏で、色調は橙褐色を呈す。やや内湾気味に立ち上がり、口縁端部でわずかに外反する。内外面に横ナデ調整が施される。21は橙褐色を呈し、小さな高台が貼付けられる。内外面とも丁寧なナデ調整が施され、高台端部の処理も丁寧である。高台付皿として図示したが、各調整の状況から輪状ツマミをもつ蓋になる可能性が高い。22は土師器甕である。口縁部・口縁端部が浅く屈曲し、嘴状の端部が形骸化している。色調は橙褐色を呈す。23は土師器坏の底部片である。色調は黄白色を呈し、どろっとした質感の胎土が特徴的である。底部はへら切りで、剝離したような痕跡も観察できる。同じ色調・胎土の高台片が同遺構から出土しており、高台付坏になる可能性もある。20～22は8世紀末から9世紀前半に位置付けられるが、23は底径が5.9cmと小さく、胎土も異なっていることから10世紀から11世紀代に位置付けられよう。また、破片資料ではあるが、糸切りされた底部片が1点出土している。

第9図から第14図はSD010・SX015・SX020出土の瓦類である。今回の調査の出土遺物の内、その大半は瓦片の出土であった。しかしながら、遺跡全体でみた場合、その出土量は少ないといえる。出土した軒瓦は、第10図1の軒九瓦1点のみであった。菊花文状に細弁化した連弁をもつもので、外区に珠文が配される。外区には圏線がみられず、豊後国分寺の瓦分類のIVb類に分類されているものである。この時期は9世紀以降に考えられている。その他は、平瓦片・丸瓦片であり、量的には平瓦の方が目立つ。平瓦の叩き成形では縄目叩きと格子目叩きがほぼ同じ割合で出土しており、凹面には2次調整叩きがみられるものが多く出土している。

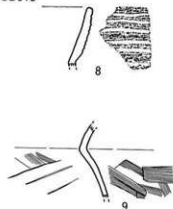
SK001



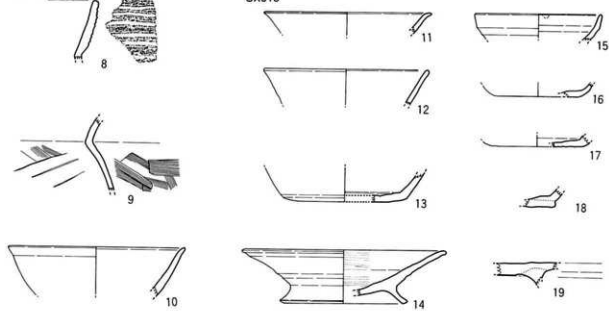
SK004



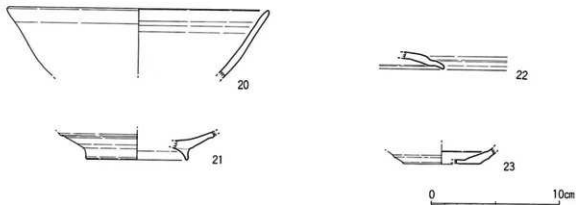
SD010



SX015

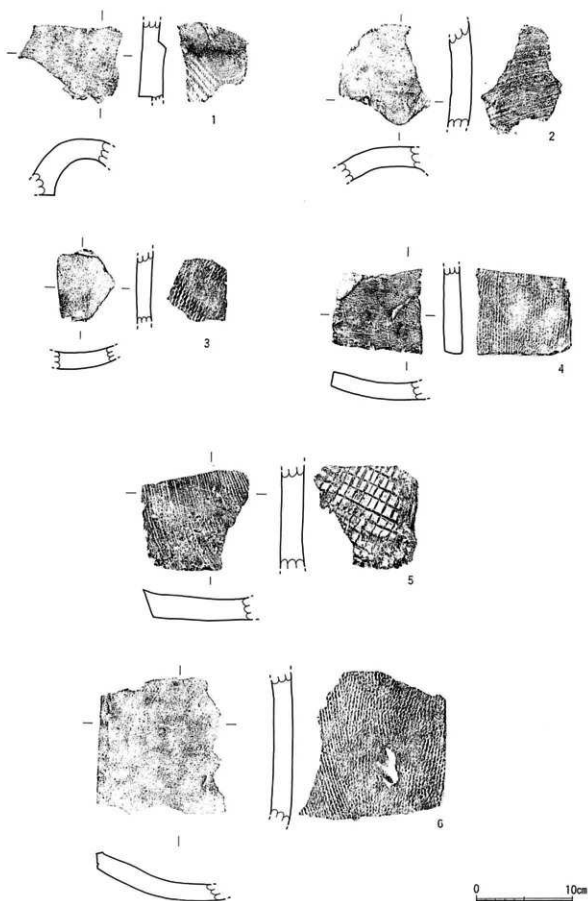


SX020

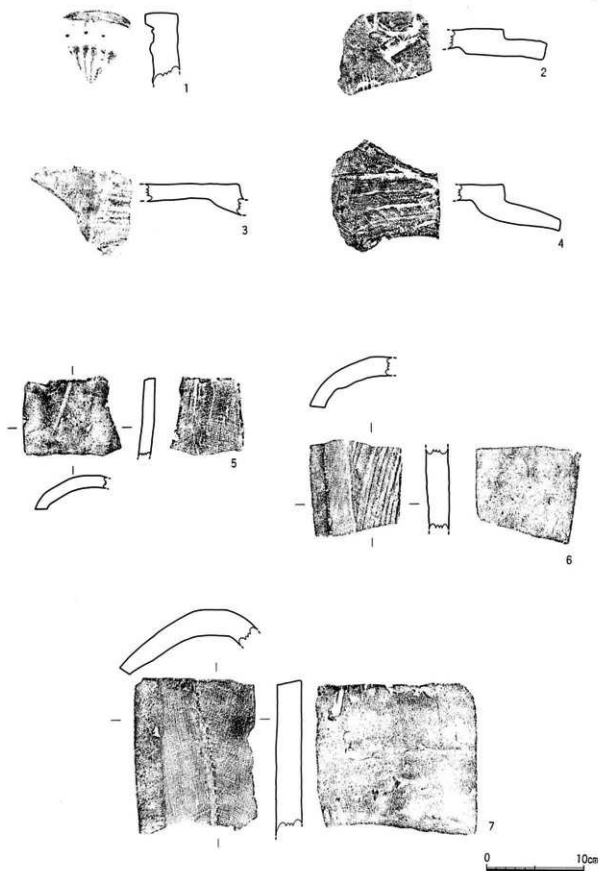


0 10cm

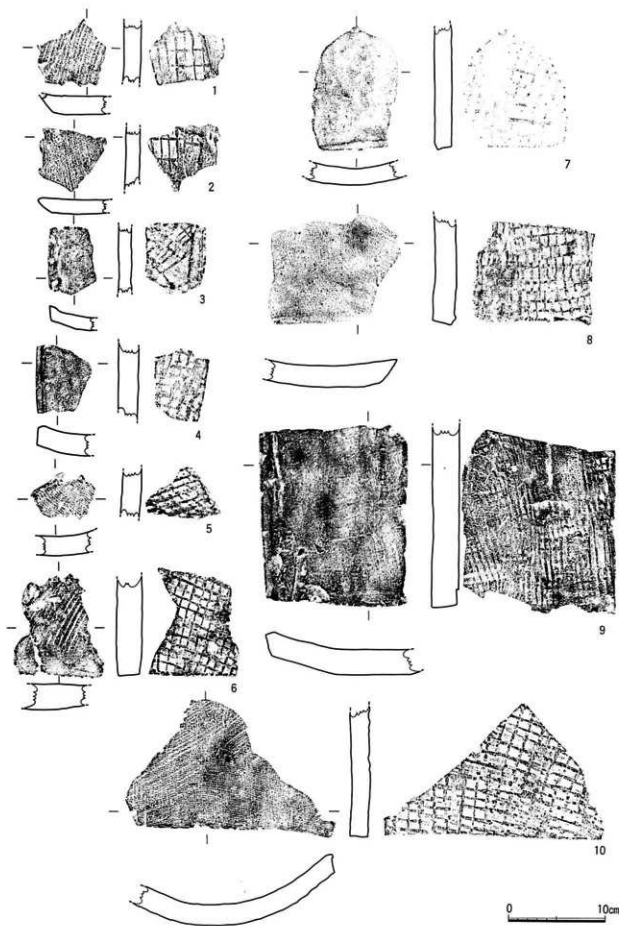
第 8 図 出土遺物実測図 (1/3)



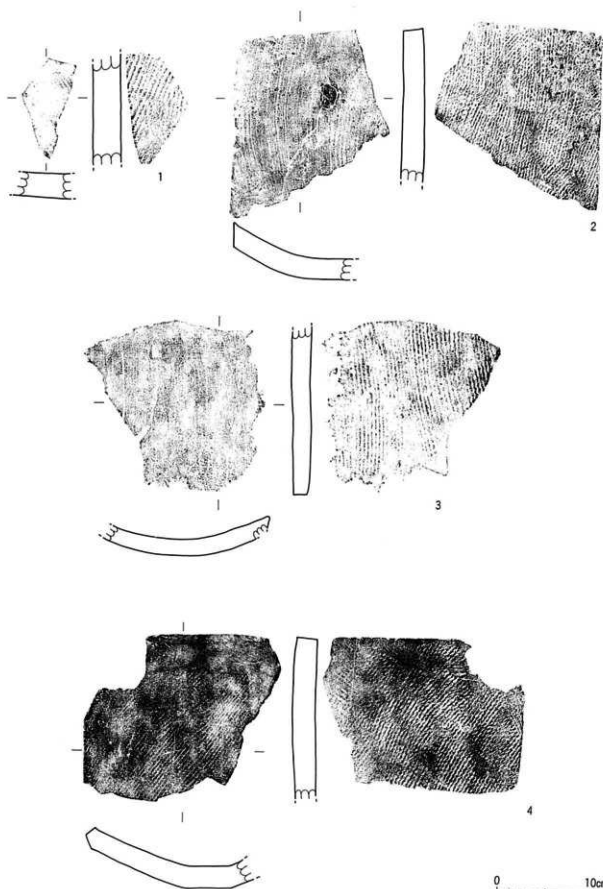
第9图 SD010出土瓦实测图 (1/4)



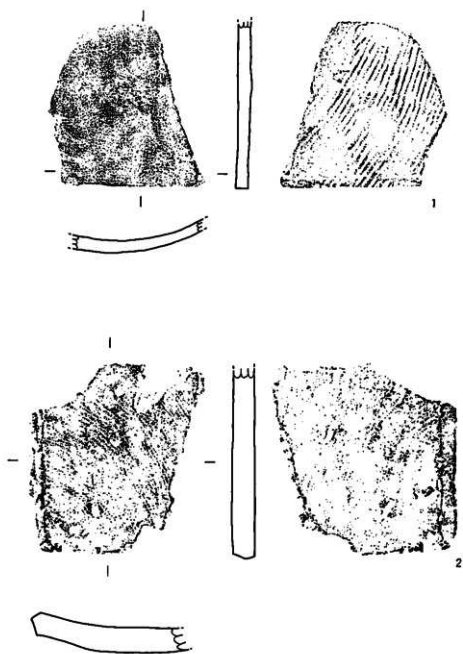
第10図 SX015出土瓦実測図① (1/4)



第11图 SX015出土瓦实测图② (1/4)

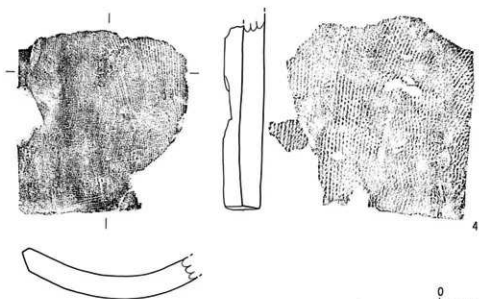
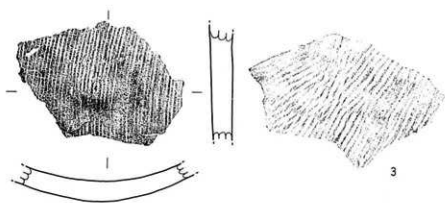
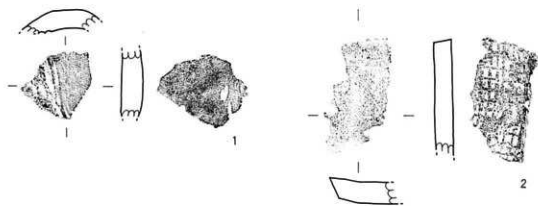


第12図 SX015出土瓦実測図③ (1/4)



0 10cm

第13圖 SX015出土瓦甕測圖④ (1/4)



0 10cm

第14圖 SX020出土瓦実測圖（1/4）

第1表 豊後国分寺跡2002遺構番号台帳

3番号	遺構番号	種別	出土	切り合い	地区	所産時期
1	SK001	土坑	灰茶褐色土(軟質、ボソボソ、黄褐色ブロック多く含む)	15→1	D1	19世紀前半～中頃
2	—	—	灰茶褐色土	15→2	C1	—
3	SK003	土坑	灰茶褐色土(礫石、炭化物、骨片含む)→炭化物部→骨片→灰茶褐色土	30→18→3	B1	近現代
4	SK004	土坑	灰茶褐色土下部に礫の層が見られる	16→18→4	B1	近代
5	SD005	溝	東側→硬化した炭褐色土→灰褐色土 西側→茶褐色土→黒褐色土→黒褐色土	10→5→23	A3→E3	18世紀前半～
6	—	—	—	15→6	D1	—
7	—	ピット	灰茶褐色土	10→7	B2	—
8	—	—	—	20→8	A2	近世以降
9	SK009	土坑	—	20→9	A2	近世以降
10	SD010	溝跡	茶褐色土→黒褐色土→黄褐色土	10→20	A2→E2	9世紀
11	—	—	—	10→11	A2→3	古代
12	SP012	ピット	灰茶褐色土	—	C1	近世以降
13	—	—	—	5→13	D3→4	近世以降
14	SK014	土坑	—	5→14	A3	18世紀前半～
15	SK015	大形竈穴遺構	黒褐色土→黄褐色土→茶褐色土	10→15	D1→2	10世紀～11世紀
16	SK016	土坑	—	16→4	A1	—
17	SK016	土坑	—	16→17	A1	—
18	SK018	土坑	—	20→18→4	B1	近世以降
19	—	—	—	20→19	B2	近代以降
20	SK020	大形竈穴遺構	—	20→16→18	B1→2	10世紀～11世紀
21	—	ピット	茶褐色土(黄色ブロック含む)	—	B1	近世以降
22	SK022	土坑	—	—	B4	近現代
23	—	—	—	5→23	C3	近代以降
24	—	ピット	茶褐色土(黄色ブロック含む)	—	D2	—
25	SP025	ピット	黒褐色土、下部に平瓦を据える	—	D2	古代

第2表 豊後国分寺跡2002出土瓦観察表

	5番	遺物番号	種類	形状	表面	その他	出土	位置	図面番号
		(大数)							
1	10	E001	瓦	横目、引き線あり	ナデ	瓦縁付瓦	伊佐原	7.9 2.6	第10図1
2	10	E002	瓦	横目、ヘラ削り	横ナデ、ヘラナデ	—	伊佐原	12.1 2.3	第10図2
3	10	E003	瓦	ナデ、ヘラ削り	横目、ナデ	—	土師原	7.4 1.6	第10図3
4	10	E004	瓦	横目、横ヘラ削り	横目調整あり	—	伊佐原	9 1.9	第10図4
5	10	E005	瓦	横目、2次調整あり	横目調整あり	—	土師原	10.9 2.4	第10図5
6	10	E006	瓦	横目、ナデ、割縁に面取り	横目調整あり	—	伊佐原	15.2 1.9	第10図6
7	15	E007	瓦	横目、引き線あり、割縁にナデ	横目調整あり	—	伊佐原	10.9 2.6	第10図7
8	15	(南黒土)	E001	瓦	横目	ナデ、横目調整あり	伊佐原	3 3.5	第11図1
9	15	(南黒土)	E002	瓦	横目、ナデ	横目調整あり、ナデ	伊佐原	7.1 1.6	第11図2
10	15	(南黒土)	E003	瓦	横目	横目調整あり、ナデ、工具痕あり	土師原	7.3 1.4	第11図3
11	15	(南黒土)	E004	瓦	横目	横目調整あり	土師原	5.4 1.4	第11図4
12	15	(南黒土)	E005	瓦	横目、ナデ、割縁に面取り	横目調整あり、ナデ	伊佐原	8.1 2.2	第11図5
13	15	(南黒土)	E006	瓦	横目、引き線あり、割縁に面取り	横目調整あり	土師原	20.7 2.1	第11図6
14	15	(南黒土)	E007	瓦	横目、ヘラ削り、ナデ	横目調整あり、ナデ、瓦縁	土師原	10.1 2.9	第11図7
15	15	(南黒土)	E008	瓦	横目	横目調整あり、ナデ	土師原	11 2.6	第11図8
16	15	(南黒土)	E009	瓦	横目、引き線あり	横目調整あり、ナデ	伊佐原	15.5 3.3	第11図9
17	15	(南黒土)	E010	瓦	横目、引き線あり	横目調整あり、ナデ	土師原	10.1 2.2	第11図10
18	15	(南黒土)	E011	瓦	横目、引き線あり	横目調整あり、ナデ	伊佐原	16.3 2.9	第11図11
19	15	(南黒土)	E012	瓦	横目、引き線あり	横目調整あり、ナデ	伊佐原	7 1.8	第11図12
20	15	(南黒土)	E013	瓦	横目、引き線あり	横目調整あり、ナデ	伊佐原	6.7 2.1	第11図13
21	15	(南黒土)	E014	瓦	横目、引き線あり	横目調整あり、ナデ	伊佐原	15.5 1.7	第11図14
22	15	(南黒土)	E015	瓦	横目、引き線あり	横目調整あり、ナデ	伊佐原	11.6 2.3	第11図15
23	15	(南黒土)	E016	瓦	横目、引き線あり	横目調整あり、ナデ	伊佐原	20.4 2.8	第11図16
24	15	(南黒土)	E017	瓦	横目、引き線あり	横目調整あり、ナデ	伊佐原	14.4 2.1	第11図17
25	15	(南黒土)	E018	瓦	横目、引き線あり	横目調整あり、ナデ	伊佐原	11.9 2.9	第11図18
26	15	(南黒土)	E019	瓦	横目、引き線あり	横目調整あり、ナデ	伊佐原	14.2 2.3	第11図19
27	15	(南黒土)	E020	瓦	横目、引き線あり	横目調整あり、ナデ	伊佐原	18.1 1.7	第11図20
28	15	(南黒土)	E021	瓦	横目、引き線あり	横目調整あり、ナデ	伊佐原	17.2 2.8	第11図21
29	15	(南黒土)	E016	瓦	横目、引き線あり	横目調整あり、ナデ	土師原	17.7 1.3	第12図4
30	20	E001	瓦	横目、引き線あり	ナデ	—	土師原	7.5 1.8	第14図1
31	20	E002	瓦	横目、引き線あり	横目調整あり	割縁あり	伊佐原	11.9 1.9	第14図2
32	20	E003	瓦	横目、引き線あり	ナデ	—	伊佐原	12.9 2	第14図3
33	20	E004	瓦	横目、引き線あり	横目調整あり、ナデ	割縁あり	土師原	21 2.2	第14図4

第3表 豊後国分寺跡2002出土遺物一覧表

表土	
土師	銅環(イト)
肥前系磁	銅板片(伊賀・武代)
瓦	銅平瓦(椿子)、丸瓦(玉縁)

瓦	
土師	銅板片
肥前系磁	銅板片
瓦	銅板片

瓦	
表土(平埴遺構土)	
土師	銅板片?
土師	銅板片(外瀬ミガキ)
肥前系磁	瓦(内野山寅)
瓦	銅板片、銅板、小坪(大形)
瓦	銅平瓦
その他	銅板片

瓦	
表土(抽出時)	
肥前系磁	銅板片
瓦	銅平瓦(横目・椿子)
その他	銅板片

S-1(SR001)	
土師	銅環
肥前系磁	銅板片
瓦	銅平瓦
その他	銅板片

S-3(SR003)	
土師	銅環
肥前系磁	銅板片
瓦	銅平瓦
その他	銅板片

S-4(SR004)	
土師	銅環
肥前系磁	銅板片
瓦	銅平瓦
その他	銅板片

S-5(SR005)	
土師	銅環
肥前系磁	銅板片
瓦	銅平瓦
その他	銅板片

S-5(SR005) 瓦	
土師	銅環
肥前系磁	銅板片
瓦	銅平瓦

S-5(SR005) 瓦	
土師	銅環
肥前系磁	銅板片
瓦	銅平瓦

S-5(SR005) 瓦	
土師	銅環
肥前系磁	銅板片
瓦	銅平瓦

S-6	
土師	銅環

S-7	
土師	銅環

S-8	
土師	銅環
肥前系磁	銅板片
瓦	銅平瓦

S-9(SR009)	
土師	銅環
肥前系磁	銅板片
瓦	銅平瓦
その他	銅板片

S-10(SR010)	
土師	銅環
肥前系磁	銅板片
瓦	銅平瓦
その他	銅板片

S-10(SR010) 瓦	
土師	銅環

S-10(SR010) 瓦	
土師	銅環

S-11	
土師	銅環
その他	銅板片

S-12(SR012)	
土師	銅環

S-13	
土師	銅環
肥前系磁	銅板片
瓦	銅平瓦

S-15(SR015)	
土師	銅環
肥前系磁	銅板片
瓦	銅平瓦

S-15(SR015) 瓦	
土師	銅環
肥前系磁	銅板片
瓦	銅平瓦
その他	銅板片

S-15(SR015) 瓦	
土師	銅環
肥前系磁	銅板片
瓦	銅平瓦

S-15(SR015) 瓦	
土師	銅環
肥前系磁	銅板片
瓦	銅平瓦

S-16(SR016)	
土師	銅環
肥前系磁	銅板片
瓦	銅平瓦

S-18	
土師	銅環

S-19	
土師	銅環

S-20(SR020)	
土師	銅環
肥前系磁	銅板片
瓦	銅平瓦

S-21	
土師	銅環

S-22	
土師	銅環

S-24	
土師	銅環

S-25	
土師	銅環

第3章 まとめ

以上が、2002年度豊後国分寺跡確認調査の調査概要である。今回得られた調査所見について記し、若干の考察を加えて、まとめに交えたい。

1. SD010溝状遺構と推定回廊跡について

溝跡は寺の伽藍域などを示す特徴的な施設であり、過去の調査でもトレンチ調査を中心におよそ23地点が調査されている。その内、南側の溝跡については、5地点と少ないが、推定中門跡との関係から比較的広く調査区が設定されて調査が行なわれている。今回の調査でもそうした一連の溝跡のつづぎが確認されている。また、広く面的に調査することにより、これまでとは異なった所見を得るに至った。

今回の調査所見では、溝跡が長土坑状に掘削されていることが確認された。こうした溝の構造は、普請割りや1日の作業量などの作業単位を示唆していると考えられる。また掘削の際、北壁についてはフラットに掘られているのに対し、南壁は長土坑状の端と端が接したままの雑な状態である。これは南側からの視点を意識したものと考えられよう。

全体的に出土遺物は概して少なく、中でも瓦の出土量の少なさが指摘できる。推定回廊跡に近接していることから、回廊建物の屋根から多量の瓦類が落ち込む状況が想定されるが、実際にはそういった状況はみられなかった。平成10年度の確認調査で発見された梵鐘鋳造遺構についても、推定回廊跡の内側、南東隅に位置していることから、回廊内でそうした一連の作業がなされるのかという指摘もあっており、今回の調査所見と合わせて再検討が必要かと思われる。

また、今回確認した一連の溝跡の東西北側は、国分寺の伽藍域を示しており、南側についても伽藍域を示している可能性を指摘しておきたい。

2. SD005溝状遺構について

SD010を一部切って平行に延びる遺構である。積土・硬化面など何らかの区画施設と考えられるが、SD010の溝跡とほとんど同じ位置、あるいはほぼ同じ方位で確認されており、国分寺の南側の寺域・伽藍域が18世紀後半段階までなんらかの区画として踏襲されてきたと考えられる。

3. SX015・SX020大形竪穴遺構について

大形竪穴遺構については、推定中門跡周辺の調査でも同じように溝跡を切って検出され、さらに溝跡の南側に造られていることがわかる。SX015・SX020も溝跡の南側に検出されており、SX015については、土層観察における足場の確認や基底部の柱穴（おそらく土を運ぶ際に用いたと考えられるトロコ状の構造物が想定される）から土取りの遺構と考えられる。SX020については、上記のような特別な状況は認められなかったが、同じく土取りの跡と考えている。遺構の時期については、10世紀から11世紀代とかなり幅をもたせているが、この時期、どのような意図で土が取られたのかは不明である。

以上、主要遺構の調査所見について記したが、残された課題は多く、大きな問題を含んでいる。今後こうした問題の一つ一つを解決していくことが、大分市教育委員会としての課題といえる。



遺構検出状況（西から）



遺構検出状況（東から）



遺構検出状況（西から）



遺構掘り下げ時（南から）



調査区から金堂跡を望む



SD005土層観察時（北から）



SD010土層観察時（西から）



SD010崩壊土検出状況（西から）



SX015検出状況（西から）



SX015南壁土層観察時（北西から）



SX015黄褐色土ビット検出時（南から）



SX015ビット群検出状況（南から）



SX015遺物出土状況



SX020掘り下げ時（南から）



SX020土層観察時（西から）

平成14年度横尾遺跡確認調査概要報告

調査の概要

横尾遺跡第86次・87次調査地点は、大分市大字横尾字江又に位置し、大野川下流左岸に沿って南北方向に延びる鶴崎丘陵東端の尾根上先端部にあたる標高約8～13mの緩やかな傾斜地に所在する。

当該地は平成12・13年度に実施した確認調査において縄文時代後期前葉に比定されるドングリ貯蔵穴群をはじめ、早期末に比定される水場の遺構ならびに姫島産黒曜石がカゴに収納された状態で発見された第82次A調査地点の南側に位置する。

また、周辺には全国的にも著名な横尾貝塚が存在し、これまでの調査によって縄文時代前期と中期の貝層が認められ、前者では汽水域に生息するヤマトシジミ、後者では内湾砂質の海域に生息するハマグリが主体となっている。

さらに、貝層中ならびにその下位において11基の埋葬遺構が検出されており、貝塚周辺に墓域が形成されていたことも判明している。

平成12年度に確認されたドングリ貯蔵穴群は縄文人の定住を示唆する遺構であり、周辺地において居住空間が展開していた可能性が想定される。

この見解と符号するようにドングリ貯蔵穴群が検出された谷部には中世の造成土に伴って大量の縄文土器が出土している。

これらの縄文土器については、極めて残存状態が良好であり、ローリングを受けたものは皆無である。

その分布状況についても谷部南側に集中しており、これらが谷部南側斜面から廃棄されたものと判断される。

第82次調査区周辺に位置する谷部の南側から貝塚にかけては比較的平坦な地形が認められ、横尾貝塚の調査においても堅穴住居跡の可能性が指摘されている堅穴遺構（縄文時代後期前葉頃）が確認されていることから、当地一帯が居住空間の最有力候補地と想定される。

平成14年度の調査は、縄文時代後期における居住空間の検出を第一義的な目的として平成14年9月11日から実施している。

以下に、今回の調査によって確認された主要遺構についてまとめる。

第86次調査

第86次調査地点は第82次A区調査地点の南側に位置する。

第86次調査区において確認された遺構は近世に比定される溝状遺構とピット数基にとどまる。

溝状遺構については、調査区を南北に縦断し、幅2.2m、深さ1.8mを測る。また、一回の掘り返しを伴うものの、大きな時期差は認められない。

第86次調査では、調査区全面において周辺調査地よりも地山（礫層地盤）検出レベルが高く、縄文時代の顕著な遺構は確認されていない。

しかしながら、調査区西側において東側から西側に傾斜する堆積層が確認されている。

第87次調査（第1～4図）

第87次調査地点は第82次A区調査地点の南側、第86次調査地点の西側に位置する。

第87次調査区では、中世・縄文時代後期前葉・縄文時代前期に比定される堆積層を確認している。

中世に比定される堆積層には第82次調査地点と同様、多量の姫島産黒曜石をはじめとする石器及び縄文土器が内包されている。この堆積層については出土遺物の埋蔵年代から12世紀末頃に比定されるものの、土層の堆積状

況から第82次調査で確認された14世紀前半頃に行われた造成と一連のものであると考えている。

また、縄文時代後期前葉に比定される堆積層を基盤面として配石遺構と焼土を確認している。

配石遺構は大小18個の礫から構成される。その中で最も大きい礫は被熱しており、石皿を転用したものである。配石遺構、焼土共に掘り込みプランは確認されず、現状で焼土については地床炉跡と判断している。

さらに、縄文時代前期に比定される堆積層については貝ならびに獣骨を多量に含む包含層であり、その堆積状況から、横尾貝塚側にあたる南東方向より廃棄されたものであると判断される。

出土した貝の種類については、残存状況が良好でないことから、現段階では不明であるものの、獣骨については鹿角やイノシシの下顎骨などが確認できる。

また、この堆積層の東側隣接地において当該期に比定される土坑を1基検出している。この土坑からは縄B式土器深鉢が廃棄された状態で出土している。

なお、第87次調査区の西側にあたる台地上についても約8,000㎡を対象に、遺跡の範囲確認調査を実施している。平成14年度における確認調査の詳細については来年度報告予定である。

(塩地調一・小住武史・羽田野裕之)



第1図 配石遺構（南から）



第2図 縄B式土器出土状況（北から）



第3図 貝・獣骨層検出状況（西から）



第4図 鹿角・下顎骨出土状況（東から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおいたし しないいせきかくにんちょうさがいほう
書 名	大分市 市内遺跡確認調査概報 —2002年度—
副 書 名	国指定史跡大友氏館跡・中世大友府内町跡・国指定史跡豊後国分寺跡・横尾遺跡
巻 次	—
シリーズ名	—
シリーズ番号	—
編 集 者 名	坪根伸也・塩地潤一・中西武尚・苅谷史徳・岩尾美保子・奥村義貴・小住武史・羽田野裕之
編 集 機 関	大分市教育委員会
所 在 地	〒870-8504 大分市荷揚町2番31号 TEL (097) 534-6111
発 行 年 月 日	西暦2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あまふし のやしろの大友氏館跡第12次	大分県大分市瀬地町	44201	330051	33°13'47"	131°13'47"	2002.05.14～ 2003.01.27	550	確認調査
しんせいのかみしろの中世大友府内町跡第23次	大分県大分市大分	44201	322052	33°13'38"	131°37'12"	2002.06.27～ 2002.12.24	1,623	確認調査
しんせいのかみしろの中世大友府内町跡第24次	大分県大分市大分	44201	322052	33°13'33"	131°37'12"	2002.11.20～ 2003.01.14	57.6	確認調査
あまふし のやしろの豊後国分寺跡	大分県大分市国分	44201	322066	33°11'37"	131°33'16"	2002.07.24～ 2002.10.28	120	確認調査
よこおし のやしろの横尾遺跡第86次	大分県大分市横尾	44201	—	33°12'1"	131°40'47"	2002.09.11～ 2002.11.11	206	確認調査
よこおし のやしろの横尾遺跡第87次	大分県大分市横尾	44201	—	33°12'1"	131°40'46"	2002.11.12～	228	確認調査

所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
大友氏館跡第12次	居 館 跡	戦国時代	掘立住建物跡、井戸跡、土坑、 竪地割	和瓦、土師器坏・皿、瓦質土 器、横溝掘跡	横溝痕の検出
中世大友府内町跡第23次	寺 院 跡	戦国時代	溝状遺構、土坑、竪地割	土師器坏・皿、瓦、土製埴、輪 入陶磁器	方形の区画空間の検出
中世大友府内町跡第24次	寺 院 跡	戦国時代	溝状遺構、土坑	瓦質土器、瓦	
豊後国分寺跡	寺 院 跡	古代・近世	溝状遺構、不明竪穴遺構	瓦、土師器坏	
横尾遺跡第86次	聚 落 跡	縄文時代・近世	溝状遺構	陶磁器	
横尾遺跡第87次	聚 落 跡	縄文時代・中世	配石遺構、境上、廃棄土坑	貝、獸骨、縄文土器	縄文時代前期の貝・獸骨 層検出

大分市 市内遺跡確認調査概報

－ 2002年度－

平成15年3月31日

発行 大分市教育委員会

大分市荷揚町2番31号

印刷 いづみ印刷株式会社

大分市大字下郡字丁畑3119-1